『タズキラ・イ・ホージャガーン』日本語訳注（2）

澤　田　　稔

富山大学人文学部紀要第 62 号抜刷
２０１５年２月

『タズキラ・イ・ホージャガーン』日本語訳注（2）

澤　田　　稔

はじめに

本訳注は『富山大学人文学部紀要』第 61 号（2014 年 8 月）掲載の「『タズキラ・イ・ホージャガーン』日本語訳注（1）」の続編であり，日本語訳する範囲は底本（D126 写本）の p. 28 / fol. 14b の 8 行目から p. 53 / fol. 27a の 20 行目までである。カシュガル・ホージャ家アーファーク派の名祖ホージャ・アーファーク（1694 年没），イスハーク派のホージャ・ダーニヤールの事績を中心にチャガタイ系モグールのハーンたちやジューンガル王国のカルマクとの連携，服属，敵対など複雑な政治関係が語られている。

日本語訳注

物語の章[1]。聞かなければならない。

ホージャ・アーファーク猊下をイスマーイール・ハーンはカシュガルから追い出していた。このお方は城市（šahr）から城市へと進んでカシュミール（Kašmīr）を経てチーン王国（Čīn mulki）のジョー（Jō < JV）[2] という所に至った。そこのカーフィル（不信心者，kāfir）たちには，バラモンの師たち（barahman šayḫlar）がいた。〔バラモンの師たちは〕霊感奇蹟（kašf karāmatlar）を見せ，カーフィルたちに助言し，自らの宗派を確立させていた[3]。ホージャ・アーファーク猊下はそこに行き，カーフィルたちに色々と不思議なことや霊感奇蹟を見せてい

1）A・B・C 三系統の諸写本における本章と次章の原文と英訳ならび注釈について，SAWADA Minoru, “Three Groups of *Tadhkira-i khwājagān*: Viewed from the Chapter on Khwāja Āfāq,” James A. MILLWARD, SHINMEN Yasushi, SUGAWARA Jun (editors), *Toyo Bunko Research Library 12. Studies on Xinjiang Historical Sources in 17-20th Centuries,* The Toyo Bunko, 2010, p. 9-30 も参照していただきたい。

2）D126 では ḤV，Or. 5338, fol. 14a では ČV と綴られているが，ms. 3357, fol. 24b; Or. 9660, fol. 14a; Or. 9662, fol. 21b の綴り（JV）に従う。ジョーはチベットのラサを指していると考えられる（SAWADA Minoru, “Three Groups of *Tadhkira-i khwājagān*: Viewed from the Chapter on Khwāja Āfāq,” p. 12, note 9）。

3）ms. 3357, fol. 24b-25a; Or. 9660, fol. 13a では「苦行や霊感奇蹟のかわりに，説伏する力を発揮してカーフィルたちを騙し，自らの宗派を確立させていた」と述べられている。

た。カーフィルたちは驚き，皆，帽子（jala）[4] を地面に投げ捨て，自らの宗教のやり方で瞑想（murāqaba）して，ホージャ・アーファーク猊下に信仰の避難所をもとめ，〔猊下は〕瞑想において，霊感奇蹟においてカーフィルたちに打ち勝ち，カーフィルたちは服従して「そなたは誰であるのか，どちらの方から来たのか」と尋ねた。猊下は「私はムスリムたちの党派（firqa）のホージャである。ヤルカンド，カシュガルの民[5] は私の弟子・信奉者（murīd muḫliṣ）である。今，ある者が来て，**【p. 29 / fol. 15a】**これらの城市を私から奪い取り，私を追い出した。部下（kiši）に命じて私の国（yurt）を取り戻してくれるよう，今，あなた方にお願いする」と言った。バラモンの師たちは「この地からあの地に人が行くこと[6] は非常に難しい」と言って，イラ（Īlā）[7] にいるカルマク（Qālmāq）の王（törä）に手紙を書いた。すなわち，「ブシュド・ハーン（Bušūd Ḫān）[8] よ，ホージャ・アーファークは偉大な人物であるようだ。ヤルカンド，カシュガルのホージャであるそうだ。この者の国をイスマーイール・ハーンが奪い取り，この者を追い出している。そなたは軍隊に命じて，この者の国を取り戻してやらねばならない。さもなければ，難儀なことに必ずなる。手紙おわる」と。

ホージャ・アーファーク猊下はこの手紙を持って行き，イラのカルマクの王に届けた。ブシュド・ハーンは全くへりくだって手紙の内容にそって行動し，大軍を集めてカシュガルに向かった。カシュガルの民は，ホージャ・アーファークがカルマクの軍隊とともに来るらしいと聞いていた。結局のところ，イスマーイール・ハーンの息子バーバーク・スルターン（Bābāq Sulṭān）は軍隊を率い出て戦い，結局，バーバーク・スルターンに矢が当たって殉教した。カルマクたちが打ち勝った。カシュガルの民は服従した。カシュガルにけりをつけ，ヤルカンドへ向かった。イスマーイール・ハーンは大軍とともに出て戦い，ヤルカンドのハーキム

4）D126 では JA と綴られているが，ms. 3357, fol. 25a; Or. 5338, fol. 14b の綴り（JLA）と Or. 9660, fol. 14a の綴り（JALA）に従い，jala と読む。

5）ms. 3357, fol. 25a により「民」（ḥalq）を補う。

6）ms. 3357, fol. 25b; Or. 9660, fol. 14b; Or. 9662, fol. 22a により「行くこと」（barmaqï）を補う。

7）天山山脈北麓のイリ（またはイリ河）を指している。Ili は中国人の発音で，トルコ系の人々は Ila と呼ぶという（E. D. Ross (tr.), *A History of the Moghuls of Central Asia. Being the Tarikh-i-Rashidi of Mirza Muhammad Haidar, Dughlat.* Edited with commentary, notes, and map by N. Elias. London: Curzon Press, New York: Barnes and Noble, 1972 (First published 1895, Second edition 1898), p. 66, note 3）。

8）ジューンガル王国のガルダン・ボショクト・ハーン（Galdan Boshoktu Khan，在位 1671-97 年）のことである。Or. 5338, fol. 14b では ŠBVR ḪAN，ms. 3357, fol. 25b; Or. 9660, fol. 14b; Or. 9662, fol. 22a では BVŠVD ḪAN（Būšūd Ḫān）と綴る。A グループ写本の Turk d. 20, fol. 25a では BVŠVKDY ḪAN（Būšūkdī Ḫān），D191, fol. 30b では BVŠVKDAKY ḪAN と綴る。

(ḥākim)[9]，アワズ･ベグ（‘Awaḍ Beg)[10] に矢が当たり，殉教した[11]。ハーンは，不幸は自らの側にあり，戦えば民が多く死ぬということを知っていた。そのためハーンは自らの従者たちとともに出て行った。城市の住民に「あなたたちはこの二人のマフドゥームザーダを**【p. 30 / fol. 15b】**長（baš）にして城市をしっかり守るように。『わたしたちを自らの信仰のままにおらせ，わたしたち自身のホージャたちを首長（sardār) にするならば，わたしたちは城門を開く。さもなければ，開かない』ということを条件とするように」と言い残していた。〔住民はカルマクに〕この条件を受け容れさせて，城門を開いた。ホージャ・アーファーク猊下を王座（taḫt）に坐らせた。カシュガルにホージャ・アーファークの長男ホージャ・ヤフヤー（Ḫōja Yaḥyā）を据えた。イスマーイール・ハーンをすべての属人（tābi‘）たちとともに連れてイラに帰った。イラにハーンたちが居を定めたのは，これからである[12]。

物語の章。聞かなければならない。

数日後，カルマクは〔イラに〕戻ることになった。ホージャ・アーファーク猊下は国の人々と相談して，〔カルマクは〕手ぶらで戻らないだろうと，四千枚の衣服（tört miŋ ton sar u pāy）

9）ハーキムには支配者，統治者，知事などの意味があるが，清朝統治期の用法からすれば，ここでは都市長官あるいは行政長官のことであろうと思われる。

10）D126 では ‘VZ と綴られているが，ms. 3357, fol. 26a; Or. 5338, fol. 15a; Or. 9660, fol. 15a の綴り（‘VḌ）に従い，‘Awaḍ と読む。なお，Or. 9662, fol. 22b では ḤVḌ と綴られている。

11）『ターリーヒ・ラシーディー』テュルク語訳附編は，ガルダン・ボショクト・ハーンをバシクトゥル・ハーンと表記し，そのヤルカンド征服について記している。しかし，そこに登場するアワズ・ベグは征服後にヤルカンドのハーキムにされている（ジャリロフ・アマンベク，河原弥生，澤田稔，新免康，堀直『『ターリーヒ・ラシーディー』テュルク語訳附編の研究』NIHU プログラム「イスラーム地域研究」東京大学拠点，2008 年，日本語訳，151 頁）。

12）ガルダンがカシュガル，ヤルカンドを占領したのは 1680 年のことである（濱田正美「『塩の義務』と『聖戦』との間で」『東洋史研究』52-2，1993 年，128 頁，146 頁，注 28）。

を与えることとなり，四千テンゲ（tengä）[13]を授けた[14]。その後，異端の人々（ahl-i bid‘at）が刻々と増え，永遠に貧しい者たちのもとからいなくならず，毎月四千テンゲになった[15]。

さて，ホージャ・アーファーク・ホージャムは暫くのあいだ統治の王座（taḫt-i salṭanat）において確乎となった。〔ホージャ・アーファークは〕霊知の海であった。しかし，ホージャたることにより統治はうまくいかず（ḫōjalïq birlä taḫt-i salṭanat ravāj tapmay），合意してトゥルファンからイスマーイール・ハーンの弟[16]ムハンマド・エミーン・ハーン（Muḥammad Emīn Ḫān）を連れてきて，王座に坐らせた。ムハンマド・エミーン・ハーンに妹がいた。ハーニム・パーディシャー（Ḫānïm[17] Pādišāh）**【p. 31 / fol. 16a】**と呼ばれていた。彼女をホージャ・アー

13）D126 では TNKHKH と綴られているが，ms. 3357, fol. 26b; Or. 5338, fol. 15b; Or. 9660, fol. 15a; Or. 9662, fol. 23a の綴り（TNKH）に従う。テンゲは名目貨幣で，プルという銅銭 50 枚が 1 テンゲに相当する（堀直「清代回疆の貨幣制度――普爾鋳造制について――」『中嶋敏先生古稀記念論集（上巻）』東京：汲古書店，1980 年，587 頁，小松久男（編）『新版世界各国史 4 中央ユーラシア史』東京：山川出版社，2000 年，305 頁）。

14）「四千テンゲ」に相当する「四千枚の衣服」をカルマクに与えたという意味であろうか。あるいは，堀氏の研究によると（「清代回疆の貨幣制度――普爾鋳造制について――」582-583 頁），ジューンガル支配期の東トルキスタン（回疆）の西部 (カシュガル～ホタン) ではプルという鋳造貨幣が通用していたが，東部（カラ・シャフル～アクス）ではプルは通用せず，銀・土地あるいは棉布で決済がなされていた。そのような実情からすれば，本文中の「四千枚の衣服」は東部から，「四千テンゲ（に相当するプル）」は西部から徴収されたと解釈することもできよう。なお，A グループの写本（Turk d. 20, fol. 26a; D191, fol. 31a）では「千枚の衣服」「千テンゲ」になっている。筆者が C 系統写本に分類している Bodleian, Ind. Inst. Turk 3, fol. 20b; Staatsbibliothek, Preussischer Kulturbesitz, Orientabteilung, Ms. or. fol. 3292, p. 49 は「十万テンゲ」とする（Sawada Minoru, “Three Groups of *Tadhkira-i khwājagān*: Viewed from the Chapter on Khwāja Āfāq,” pp. 16, 28-29 参照）が，本書【pp. 49-50 / fol. 24b-25a】で後述されるように年額 10 万テンゲということであろう。

15）バルトリド氏はこの段落のテキストを三写本（D191, D126, C582）により載せている（V. V. Bartol’d, “Retsenziya na knigi: Taarikh-i Emenie. Istoriya vladetelei Kashgarii (1905),” *Sochineniia*, tom 8, Moscow: Nauka, 1973, p. 217）。

16）実際には弟ではなく，甥（イスマーイール・ハーンの兄弟スルターン・サーイード・バーバーの息子）にあたる。ハーン家成員の治世と系図については，O. F. Akimushkin, “Khronologiya praviterei vostochnoi chasti Chagataiskogo ulusa (liniya Tugluk-Timur-khana).” *Vostochnuii Turkestan i Srednyaya Aziya. Istoriya. Kul’tura. Svyazi.* Moskva: Nauka, 1984, pp. 156-164, 224-225 を参照。

17）D126 では ḪNM と綴られているが, ms. 3357, fol. 26b; Or. 9660, fol. 15b; Or. 9662, fol. 23a の綴り（ḪANYM）に従う。

ファークに嫁がせた（nisbat qïldïlar）[18]。ムハンマド･エミーン･ハーンは猊下に帰依した（irādat qïldïlar）。それからホージャ･アーファークの同意によりムハンマド･エミーンはイラの山に行って，カルマクたちから多くの人を捕虜にしてきた。幾人かの王族カルマク（törä Qālmāqlar）も手に落ちた。結局のところ，スーフィーたちが優勢になり反抗的なことをして，騒乱（fasād išlär）が多くなった。猊下は分からなかった。なぜならば，神的なことに没頭していた（mustaġraq-i ilāhī edilär）からである。ムハンマド･エミーン･ハーンは自らの不安におびえて，逃げ出し去った。ハーンを，〔ハーン〕自身の従者の一人が殉教死させた。ホージャ･アーファーク･ホージャム猊下が再び統治の王座に坐った。

物語の章。この二人のマフドゥームザーダ，すなわち，ホージャ・シュアイブ・ホージャム（Ḫōja Šu‘ayb Ḫōjam）とダーニヤール・ホージャム（Dāniyāl Ḫōjam）[19] について聞かなければならない。

〔この二人のマフドゥームザーダは〕ホージャ・アーファーク猊下が統治の王座に坐っていた一回目のときに，スーフィー・ディーヴァーナたち（ṣūfī dīvānalar）[20] の様子が変になっているのを見た。かれら〔二人のマフドゥームザーダ〕は好機をみいだし，自分の属人たちの幾人

18）Staatsbibliothek, Preussischer Kulturbesitz, Orientabteilung, Ms.or.oct. 1692 写本に載せられている “Geneaology der Chogas”（p. 164）によると，「〔ホージャ・アーファーク猊下の〕三番目の妻はアブド・アッラシード・ハーンの妹（siŋil）フスナ・バーヌー・ハニム・パーディシャ（Ḥusna Bānū Ḫanïm Pādišah）で，この方から三人の息子と二人の娘〔が生まれた〕。最初の息子はホージャ・マフディー・ホージャム，二番目はホージャ・ハサン・ホージャム・サーヒブキラーン，三番目はクルチュ・ブルハーン・アッディーン・ホージャム，娘はパーディシャー・ハーン・アズィーム，アーファーク・ハーン・アズィーム〔であった〕」と記されている。アブド・アッラシード・ハーンとムハンマド・エミーン・ハーンは兄弟であるので，フスナ・バーヌー・ハニム・パーディシャは本書のハーニム・パーディシャーのことであるとみなされる。*Cf.* Martin Hartmann, “Ein Heiligenstaat im Islam: Das Ende der Caghataiden und die Herrschaft der Choğas in Kašgarien.” *Der Islamische Orient.Berichte und Forschungen*, pts. 6-10, Berlin: Wolf Peiser Verlag, 1905, pp. 313-314.

19）この二人のマフドゥームザーダ（「マフドゥーミ･アーザムの子孫」の意）は，イスハーク派の名祖ホージャ・イスハークの子ホージャ・ヤフヤー（別名ホージャ・シャーディー）の子ホージャ・ウバイド・アッラーの子供である。ただし，ホージャ・ウバイド・アッラーは綴りで 1 字違いであるためか，兄弟のホージャ・アブド・アッラーと混同されがちである。本書【p. 8 / fol. 4b】の血統では，ホージャ・ダーニヤールの父の名をホージャ・アブド・アッラーと記すが，【pp. 27-28 / fol. 14a-b】の叙述では，ダーニヤールとシュアイブの父はホージャ・ウバイド・アッラーである（拙稿「『タズキラ・イ・ホージャガーン』日本語訳注（1）」67，86 頁参照）。

20）ディーヴァーナには「乞食僧（beggar-monk）」（Gunnar Jarring, *An Eastern Turki-English Dialect Dictionary,* Lund, 1964, p. 87）の意味がある。また，ディヴァナはイスラーム神秘主義とシャーマニズムを具体化した存在でもあった（シャルル･ステパノフ，ティエリー･ザルコンヌ（著），中沢新一（監修），遠藤ゆかり（訳）『シャーマニズム』大阪：創元社，2014 年，28 頁）。

かを同行させて〔ヤルカンドから〕退去していった。カシュミールに行って滞在した。ここに残ったそのハリーファ（ḫalīfa[21]，師範代）たちをスーフィーたちはアルトゥン（Altun）から見つけて捉え，蔑視しながら引っ張っていき，ホージャ・アーファーク・ホージャムのもとへ連れていった。〔ホージャ・アーファークは〕「そなたたちはどういう者であるのか」と尋ねた。この者たちは「我々はイスハーク・ワリー猊下の子孫からのマフドゥームザーダたちの部下（kiši）である」と言った。**【p. 32 / fol. 16b】**猊下はその言葉を聞き，自分のスーフィーたちに対して怒り，「我々が一つの背中（pušt）[22]の子孫から出ているのであれば，我々の先祖がこのような抗争をしなかったのであれば，我々はどうして対立せねばならないのであろうか。むしろ，我々は間にいる懐疑者たちを取り除こう」と言った。

詩
おお，神よ，懐疑する者も悪意ある者も排除せよ
ふたつともの恨みや憎しみから免れるように

〔ホージャ・アーファーク〕猊下は，「マフドゥームザーダたちに水・土地はあるのか」と尋ねた。ハリーファたちは，「カシュガルでファイザーバード（Fayḍ-ābād）[23]，ヤルカンドでトク

21）D126 では ḪLFH と綴られているが，ms. 3357, fol. 27b; Or. 5338, fol. 16a; Or. 9660, fol. 16a; Or. 9662, fol. 23b の綴り（ḪLYFH）に従う。

22）D126 では FSTPH と綴られているようであり，ms. 3357, fol. 28a; Or. 9660, fol. 16a では PŠTH, Or. 9662, fol. 24a では FŠTH と綴られている。Or. 5338, fol. 16a では，判読しにくいが，FVŠT と綴られているようである。A グループの写本（Turk d. 20, fol. 26b; D191, fol. 32a）では PŠT と綴られており，これに従う。

23）ファイザーバードはカシュガル城市の東方およそ 67km に位置する町。Sven Hedin, *Central Asia Atlas* (The Sino-Swedish Expedition, Publication 47, I. Geography, 1), Stockholm: Statens Etnografiska Museum, 1966, NJ43 の地図参照。

ズ・ケント（Tōqūz Kent）[24]，ホタンでアク・サラーイ（Āq Sarāy）[25]，アクスでアク・ヤール（Āq Yār）[26] を，ハーンは寄進（naẕr）していた」と言った。猊下は次のように命じた。「今もまた，それらの土地の収穫 [27] を，そなたたちが取れ。アルトゥンに費やして，その残りをマフドゥームザーダたちに送れ。〔さらにまた，そなたたちの門弟たち（yārānlar）がいれば，そなたたちは〔かれらと〕一緒にいて，栄誉を受けて過ごすように〕[28]。それのみならず，そなたたちはマフドゥームザーダたちに人を遣るように。彼らも来るであろう。我々にある如何なるもの〔に対して〕も，我々は共有者（šarīk）とみなすであろう」〔と言って〕[29]，非常に同情した。ハリーファたちで，四方八方に分散していた者たちが集まり，アルトゥン・マザール [30] に居を占め，それらの土地の収穫を消費して（ḫarjī ḫarājāt qīlīp）[31]，残ったものをマフドゥームザーダたちに贈って，暫くのあいだ栄誉を受けて過ごした。ハリーファたちはマフドゥームザーダたちに〔「もしお越しになるならば，よりよくなるはずである」〕[32] と，書き付けを送った。この書き付けの

24）トクズ・ケントはヤルカンド城市とホタン城市の中間に位置する町グマ（Guma，皮山）の「9つの村」の包括的名称である（堀直「清代「葉爾羌」の境域」『甲南大学紀要 文学編』134，歴史文化化特集，2004年，104-105頁参照）。ショー氏はトクズ・ケント（“nine villages”）として，ヤルカンドの南方・東南方の広大な範囲に点在する Pialma〔グマの東南およそ 87km〕，Guma，Zangoya〔グマの東南およそ 52km〕，Chodar，Sanju，Boria，Dawa, Koshtak，Ui-Tughrak を挙げているが，根拠は記されていない（Robert Barkley Shaw, “The History of the Khōjas of Eastern-Turkistān summarised from the Taẕkira-i-Khwājagān of Muḥammad Ṣādiq Kashghari,” edited with introduction and notes by N. Elias, Supplement to the *Journal of the Asiatic Society of Bengal*, Vol. 66, Part 1, 1897, p. 38, footnote 18）。本書のトクズ・ケントは，ファイザーバードなど3所との釣り合いを考えると，グマの「9つの村」であろう。なお，グマであるならば，ヤルカンド・ハーン国のフラド・ハーン（スルターン・アフマド・ハーン）がイスハーク派のホージャ・ヤフヤー（別名ホージャ・シャーディー）に「グマ村」を寄進したという記事とも符合する（『ターリーヒ・ラシーディー』テュルク語訳附編の研究，日本語訳，136頁参照）。

25）アク・サラーイはホタン城市の西北西およそ 24km に位置する村。Aurel Stein, *Innermost Asia*, vol. 4, Maps, Oxford: Clarendon Press, 1928, Serial No. 9 の地図参照。

26）アク・ヤールはアクス城市の西南西およそ 37km に位置する村。Sven Hedin, *Central Asia Atlas*, NK44 の地図参照。

27）D126; Or. 5338, fol. 16b; Or. 9660, fol. 16a では ḫuṣūlāt，Or. 9662, fol. 24a では ḫuṣūl，ms. 3357, fol. 28a では maḥṣūlāt と記す。

28）「さらにまた～過ごすように」の一文は D126 と Or. 5338, fol. 16b にはない。ms. 3357, fol. 28b; Or. 9660, fol. 16a; Or. 9662, fol. 24a により補う。

29）「と言って」は D126 と Or. 5338, fol. 16b にはない。ms. 3357, fol. 28b; Or. 9660, fol. 16a; Or. 9662, fol. 24a により補う。

30）D126 では Altūn mazārat。ms. 3357, fol. 28b; Or. 5338, fol. 16b では Altūn mazāratī, Or. 9660, fol. 16a では Altūn mazār，Or. 9662, fol. 24a では Altūn mazārī と表記されている。

31）Or. 5338, fol. 16b では ḫarj ḫarājāt qīlīp, ms. 3357, fol. 28b; Or. 9660, fol. 16b; Or. 9662, fol. 24b では ḫarājāt qīlīp と記されている。

32）「もしお越しになるならば，よりよくなるはずである」の一文は D126 と Or. 5338, fol. 16a にはない。ms. 3357, fol. 28b; Or. 9662, fol. 24b; Cf. Or. 9660, fol. 16b により補う。

内容はマフドゥームザーダたちに影響を及ぼし，行きたいという希望の念が生じた。いくら踏み出そうとしても，勇気のなさのため歩を進められないでいた。結局，サーンジュー（Sānjū）[33] に【**p. 33 / fol. 17a**】出た[34]。「我がおじ（‘ammïm<‘MM）[35] ホージャ・アーファークよ，我々は，あなたからの許可でサーンジューへ歩を進めた。我々に安心となるように，印章による証書（tamassuk）を送るならば，我々は安堵して行くでしょう」と，手紙を書いて送った。この手紙が猊下に着くやいなや，〔猊下は〕喜んで，捺印した保証の手紙を書いて，「〔マフドゥームザーダたちは〕必ず来るように。我々の敷物にあるいかなるものも，我々は共有であるとみなそう（dar miyān körgäymiz）。〔マフドゥームザーダたちは〕以前よりもより良く過ごすであろう」という捺印した手紙を送った。この手紙がマフドゥームザーダたちに届き，〔マフドゥームザーダたちは〕安心してヤルカンドに向かった。しかし，心配苦慮から免れてはいなかった。結局のところ，ホージャ・シュアイブ・ホージャムは「おお，ホージャ・ダーニヤールよ，わたしがヤルカンドの方に足を置くたびに，わが足はうしろに引かれている。〔ヤルカンドなど〕これらの国（bu mamlakatlar）はわたしの目には，血と哀悼に〔満ちているように〕見える。もしわたし自身が行くならば，あなたが行くことは適当であると，わたしは思わない。わが子孫が絶えないように」と言い，数名の者を同行させて，ティーズナーブ河（daryā-yi Tīznāb）[36] の岸に至っていた。そこからダーニヤール・ホージャムを戻らせた。彼自身は進んでティーズナーブの岸に泊まっていた。四百人のスーフィー・ディーヴァーナたちが来て，シュアイブ・ホージャム・アズィーズ猊下を殉教死させた。＜「我々は神のもの。我々は神のみもとに帰る」と言われている＞〔『クルアーン』2-156〕。そして祝福された遺体を袋に詰めてティーズナーブ河に投げ込んだ。数日たつまで，この悪行を〔ホージャ・アーファーク〕猊下に言わなかった。その〔シュアイブ・ホージャムの〕弟子・信奉者（murīd muḫliṣ）たちは祈願（du‘ā）とタクビール[37] をして進んでいた。

さて，マフドゥームザーダたちの【**p. 34 / fol. 17b**】召使い（ḫādim）のなかに一人，勇敢で高潔な者がいた。黒い粗布を身につけ顔を黒く塗り，ホージャ・アーファーク猊下のもとに行ってサマー（samā‘）[38] をしはじめた。皆は驚いてしまった。猊下は「おまえはいかなる者なのか。

33）グマ（Guma Bazar）の南南東およそ 50km に位置する Sanju Bazar，もしくはその傍らを流れる河川（Sanju Darya）に当たろう。Sven Hedin, *Central Asia Atlas*, NJ44 の地図参照。

34）D126 では「サーンジューに」と「出た」の間に「我々は歩を進めた。我々に安心」との語句が記されているけれども，抹消線が引かれている。Or. 5338, fol. 16b; ms. 3357, fol. 28b; Or. 9660, fol. 16b では「サーンジューに出た」，Or. 9662, fol. 24b では「サーンジューに来た」となっている。

35）血縁上は，おじ（伯父 / 叔父）ではない。

36）ヤルカンド・オアシスの東部を流れる河川。

37）アッラーフ・アクバル（神は偉大なり）と唱えること。

38）歌舞の儀式。

おまえにいかなる悲しみが生じたのか」と尋ねた。その人は「わたしはマフドゥームザーダたちの者である。あなたの許可でマフドゥームザーダたちは来ていた」と言い，出来事を説明した。猊下はこの知らせを聞くやいなや，手で膝を叩いてディーヴァーナたちに怒りをこめて「おお，死刑執行人〔のごとき〕ディーヴァーナたちよ，おまえたち自身にもしたし，わたしにもした。最後の審判まで，我々からこの悪名は免れない。まもなく，ある者が来て，おまえたちの喉を羊のように切るであろう」と言った[39]。猊下はウラマーたちの一団とともにティーズナーブの岸に来て，シュアイブ・ホージャムの遺体を投げ込んだ所から水がひいて，水のない所に袋があるのを見つけた。〔猊下は〕自ら降り立ち泣き悲しんで，祝福された遺体をとって敬意をこめて駱駝に乗せ，駱駝の手綱を自らとってヤルカンドに運び，礼拝（namāz）をおこないアルトゥンのなかに埋葬した。

さて[40]，ダーニヤール・ホージャムは自らディーヴァーナたちの危害から逃れ，ダフビードに行き，マフドゥーミ・アーザム猊下＜彼の上に祝福がありますよう＞の清らかな墓（marqad-i muṭahhar）[41]に倒れ込み，泣き叫んで言った。すなわち，「偉大なる父祖（bābā-yi buzurgvār）よ，我々にとって，これは何という**【p. 35 / fol. 18a】**暴虐であることか。我々は避難所（baš panāh[42]）となるべき場所を見いだせず，我々自身の親戚からこの様な（bu rang）不誠実さを味わうとは」と言って，彼の祝福された目は眠りに入った。彼はマフドゥーミ・アーザム猊下〔と〕ホージャ・イスハーク・ワリー猊下が現れているのを見た。彼らは「おお，子のホージャ・ダーニヤールよ，頭を上げなさい。＜忍耐は喜びへの鍵である＞というハディースにそって行動しなさい。ひとつの困難はふたつの安易のあいだにある。おお，子よ，まもなく，かの国のホージャ位と統治の王座（ḫōjalïq vä taḫt-i salṭanat）はそなたやそなたの子のものになる」と言って消えた。ダーニヤール・ホージャムは目を覚まして心を静め，バーギ・ブランドに行った。ホージャ・イスハーク・ワリー猊下の墓（marqad）を詣でて暫くいて，そこからフジャンド（Ḫūjand）に行き，そこで首長（kad-ḫudā）となった。真実探求者たちのガウス（助け手），霊知者たちの

39）この後に，A グループ写本の Turk d. 20, fol. 28a では（Cf. D191, fol. 34a），「猊下が逝去してから後，アク・バシュ・ハーンが数千のディーヴァーナたちを集め，羊のように〔ディーヴァーナたちの〕喉を切って水車の渠に〔彼らの血を流して〕，水車を回して粉を挽いた」と記されている。

40）ms. 3357, fol. 30b では「物語の章（faṣl-i dāstān）」と記されているが，D126; Or. 5338, fol. 17b; Or. 9660, fol. 17b; Or. 9662, fol. 26a には「さて（ammā）」と記されているだけである。

41）サマルカンドの北郊ダフビードにあるマフドゥーミ・アーザムの墓については，拙稿「『タズキラ・イ・ホージャガーン』日本語訳注（1）」80 頁参照。

42）D126 では panā であるが，ms. 3357, fol. 30b; Or. 9660, fol. 17b の panāh による。

クトブ(枢軸),預言者たちと使徒たちの継承者[43],すなわちマウラーナー・ヤークーブ・ホージャム猊下(Ḥaḍrat-i Mawlānā Ya'qūb Ḫōjam[44])がフジャンドで生誕した。完全性に達するまで,〔多くの〕[45] 奇蹟(ḫāriq-i 'ādātlar)がこの方から生じた。詳しく説明するには時間が微妙。それ故に簡潔にする。ホージャ・ヤークーブ・ホージャムをホージャ・ジャハーン(Ḫōja Jahān)と名付ける理由は次の通りであった。すなわち,この方はホージャ・アブド・アルハーリク・グジュドワーニー(Ḫōja 'Abd al-Ḫāliq Ġujduwānī)[46] から教導を受けていた[47]。その方は,この子は世界征服者(ジャハーンギール)となる,ホージャガーンのスィルスィラ(道統の系譜)を普及させる,と言っていた。それ故にホージャ・ジャハーンと名付けられた。さらにまた,この城市に偉大な尊師('azīz-i buzurg[48])がいた。この方も明敏の光で明らかにして,**【p. 36 / fol. 18b】**「このホージャは世界征服者になる。心的状態の学問('ilm-i ḥāl),言葉の学問,詩集において,その時代で同等の者はいない。この子をホージャ・ジャハーンと呼びなさい」と言って,名前を付けた[49]。学問の修得は,学習において難しいことがあるたびに解決するという具合であった。時々サマルカンド,ブハラに行って,学識者(ahl-i faḍl)と宴会(mašrab)をもよおし,

---

43) D126 と Or. 9662, fol. 26b では vāriṯ-i anbiyā va al-mursalīn であるが, ms. 3357, fol. 31a; Or. 5338, fol. 18a; Or. 9660, fol. 18a の vāriṯ al- anbiyā va al-mursalīn が正しい。

44) D126 および ms. 3357, fol. 31a; Or. 5338, fol. 18a では Ḫōjam に対格の nï が付されているが(Cf. Or. 9660, fol. 18a), Or. 9662, fol. 26b のように nï は不要である。

45) ms. 3357, fol. 31a; Or. 9660, fol. 18a; Or. 9662, fol. 26b の čandān により補う。

46) D126 では Ḫōja 'Abdū al-Ḫāliq 'JDVANY と誤記されており, ms. 3357, fol. 31b; Or. 5338, fol. 18a; Or. 9660, fol. 18a; Or. 9662, fol. 26b の ĠJDVANY による。アブド・アルハーリク・グジュドワーニー(1179 年没)はナクシュバンディー教団(当時の名称はホージャガーン教団)の始祖である(川本正知「ナクシュバンディー教団」『シリーズ世界史への問い 4 社会的結合』東京:岩波書店,1989 年,174 頁参照)。

47) すでに逝去している聖者グジュドワーニーの霊魂から教導をうけたということである。

48) D126; Or. 5338, fol. 18a; Or. 9660, fol. 18a; Or. 9662, fol. 26b では BZRVK/PZRVK と誤記されており, ms. 3357, fol. 31b の BZRK による。

49) この一文の後に, ms. 3357, fol. 31b には「シャイフ・マスラハト猊下〔の墓廟〕とともにホージャ・アブド・アルハーリク・フジャンディーの墓廟に行って助けを求めていた。そして多くの恩恵を得ていた」(Ḥaḍrat-i Šayḫ Maṣlaḥatlarï birlä Ḫōja 'Abd al-Ḫāliq Ḫujandīnïŋ mazārātlarïġa barïp isti'ānat tilär edilär vä bisyār fayḍ tapar edilär)という文章がある。Or. 9660, fol. 18b では「シャイフ・マスラハト・フジャンディー猊下の墓廟に行って助けを求めていた。多くの恩恵を得ていた」, Or. 9662, fol. 27a では「ホージャ・ヤークーブ・ホージャム猊下はシャイフ・フジャンディー猊下の墓廟に行って助けを求めた」となっている。A グループ写本の Turk d. 20, fol. 29b(Cf. D191, fol. 35b)は,「いつもシャイフ・ムスリフ・アッディーン(Muṣliḥ al-Dīn)・フジャンド(フジャンディー:D191, fol. 35b)の墓廟に行って助けを求めていた。シャイフ猊下から多くの恩恵,施し(futūḥ)を得ていた」と記す。タジキスタン共和国のフジャンド市内にあるシャイフ・ムスリフ・アッディーン(またはシャイフ・マスラハト)廟の現状と他の史書における言及については,澤田稔「第 1 章 フェルガナ盆地における聖地調査」『中央アジアのイスラーム聖地――フェルガナ盆地とカシュガル地方――』(シルクロード学研究 28),奈良:シルクロード学研究センター,2007 年,12-13 頁を参照。

討論しあっていた。時々フジャンドに来て勉学していた。

物語の章。ホージャ・アーファーク・アズィーズ猊下について聞かなければならない。〔ホージャ・アーファークは〕ヤルカンドの統治の王座に坐り，ムスタファー〔預言者ムハンマド〕の聖法（シャリーア）を広め，裁判官たち（dād-ḫvāhlar）に帝王の命令を布き，マスナヴィー[50]を読ませ，本質の真理（ḥaqāyiq-i ma‘ānī）を説明し，集会の徒を宙返りさせて忘我にし（ahl-i majlisnï mu‘alluq-zanān bī-ḫvud qïlïp），愛をあらわにしていた。

詩
酌人よ，溢れんばかりに快楽の杯（jām）[51]を持て，今日
今や，おまえは見つけないだろう，このようなめぐる精神的王国を
眼の片隅の中でこの王に道を与えれば，十分である
つまり王中の王たることは，わが師に代わって，導きである

さて，ハーニム[52]・パーディシャーから一人の息子がいた。天空の枢軸，奇蹟の選ばれし導き，すなわちホージャ・マフディー（Ḫōja Mahdī）と呼ばれていた[53]。〔ホージャ・アーファークは[54]〕いつも，「私は神と使徒の前で，恥ずかしくて頭を上げられないでいた。カルマクたちの**【p. 37 / fol. 19a】**庇護で，私がこれらの城市を取って坐していた時に，＜神に賞賛あれ＞，

50）ルーミーの主著『精神的マスナヴィー』（Maṯnavī-yi ma‘navī）を指しているのであろうか。

51）ms. 3357, fol. 32a による。D126; Or. 5338, fol. 18b; Or. 9660, fol. 18b; Or. 9662, fol. 27a では jām ではなく，bazm（宴）となっている。

52）D126 はこの個所では ḪNM と綴る（他の個所では ḪANM とも）。ms. 3357, fol. 32a; Or. 9660, fol. 18b の ḪANM(Ḫānïm) に従う。なお，Or. 5338, fol. 18b; Or. 9662, fol. 27b は ḪNYM とする。以後，D126 の綴り（ḪNM/ ḪANM）にかかわらず，本書の訳文では「ハーニム」と表記する。なお，本書の前述箇所【pp. 30-31 / fol. 15b-16a】において，ムハンマド・エミーン・ハーンの妹ハーニム・パーディシャーがホージャ・アーファークに嫁いだことが述べられている。

53）A グループ写本の Turk d. 20, fol. 30a は「ハニム（Ḫanïm< ḪNYM）・パーディシャーから二人の息子があった。一人はホージャ・ハサン（Ḥasan）で，一人はホージャ・マフディー」とする。なお，同じ A グループ写本の D191, fol. 35b は「ハーニム・パーディシャーから息子があった」とのみ記す。Mīr Ḫāl al-Dīn Kātib al-Yārkandī, *Hidāyat Nāma*, British Library, Or. 8162, fol. 26a-b によると，ハーニム・パーディシャーはモグール・ハーン家のアブド・アッラシード・ハーンの娘であり，彼女からホージャ・マフディー，ホージャ・ハサン，クルチュ・ブルハーン・アッディーン（Qïlïch Burhān al-Dīn）が生まれている。『ターリーヒ・ラシーディー』テュルク語訳附編，日本語訳，157 頁によっても，ホージャ・マフディーの母ハーニム・パーディシャーはアブド・アッラシード・ハーンの娘であるが，アブド・アッラシード・ハーンの妹とする史料も存在する（本書【p. 31 / fol. 16a】の注を参照）。

54）Or. 9662, fol. 27b のみが主語としてホージャ・アーファークの名を記している。

わが子[55]が生まれた。今や，私の黒い顔が白くなった」と言っていた。暫くしてのち，〔ホージャ・アーファークは〕この移ろいやすい世からとこしえの世へ旅立った[56]。<「我々は神のもの。我々は神のみもとに帰る」と言われている>〔『クルアーン』2-156〕。猊下の祝福された身体をカシュガルに持っていき，ヤグドゥ（Yāġdū）の地に埋葬した。哀悼辛苦により新たに大騒ぎとなった（mātam muṣībatdïn qiyāmat tāza boldï）。ハーニム・パーディシャーはその子とともにヤルカンドにおいて[57]，猊下の長男であるホージャ・ヤフヤーはカシュガルにおいて統治の王座に確乎となった。

さて，ホージャ・ヤフヤーをハーン・ホージャム（Ḫān Ḫōjam）と呼んでいた。数日後，ハーニム・パーディシャーはヤルカンドにおける最上位の学者（a‘lam）ミールザー・バラート・アーホンド（Mīrzā Barāt Āḫvund）を連れてカシュガルへ，〔アーファーク・ホージャ猊下の〕[58]お墓参りをするために行った（sar-i[59] ḫāk mazārat üčün bardïlar）。ホージャ・ヤフヤー猊下も出迎え，〔ハーニム・パーディシャーたちに〕敬意を表して墓前に（sar-i ḫākġa）降り立たせた。ホージャ・ヤフヤーは毎日，城市に泊まり，朝にハーニム・パーディシャーのもとに来ていた。ある日，ミールザー・バラート・アーホンドはホージャ・ヤフヤーを内々に招いて（ḫalwatkä čïrlap），「おお，ホージャムよ，婦人（maẓlūm kiši）[60]によって国を保つことは難しい。あらゆる方面からクルグズ（Qïrġïz）が待ち伏せしている。そなたたちが行って首府（pāy taḫt）ヤルカンドで統治すれば，ハーニム・パーディシャーはカシュガルで栄誉を与えられて居れば，敵たち[61]は機会を得られない」と言って忠告した。ホージャ・ヤフヤーは次のように言った。「〔人々は〕[62]

55）文脈上ホージャ・マフディーを指しているが，A グループ写本の Turk d. 20, fol. 30a; D191, fol. 35b では直前にホージャ・ハサンの名前を挙げているので，A グループ写本において「この子」は文脈上ホージャ・ハサンを指している。

56）ホージャ・アーファークは 1105 年 7 月 1 日（西暦 1694 年 2 月 26 日）に逝去した（『ターリーヒ・ラシーディー』テュルク語訳附編，日本語訳，156 頁）。

57）D126; Or. 5338, fol. 18b; Or. 9660, fol. 19a では YARKNDH と記すが，ms. 3357, fol. 32b の YARKNDDH に従う。

58）Or. 9662, fol. 27b のみが，Ḫaḍrat-i Āfāq Ḫvājamnïŋ ziyāratlärigä bardïlar と記す。

59）D126; ms. 3357, fol. 33a; Or. 5338, fol. 19a は SARY ḪAK と綴る。Or. 9660, fol. 19a はこの個所では SAR ḪAK と綴るが，直後の個所では SARY ḪAK とする。

60）「抑圧された者」（oppressed one）という字義の maẓlūm は，カシュガル等において「婦人」（woman）という語の代わりに使用される（Robert Barkley Shaw, *A Sketch of the Turki Language as Spoken in Eastern Turkistan (Kàshghar and Yarkand)*, Part 1, Culcutta, 1878, p. 92）。

61）D126 と Or. 5338, fol. 19a では，「敵たち」（dušmanlar）の前に「友たち」（dūstlar）があるが，不要である。なお，dušman の綴りが D126; Or. 9660, fol. 19a; Or. 9662, fol. 28a では DVŠMAN となっている。

62）ms. 3357, fol. 33a; Or. 9662, fol. 28a により主語の「人々」（ḫalq）を補う。なお，Or. 9660, fol. 19b は「人びと，学者」（ḫalq ‘ālim）とする。

非難[63]叱責するだろうか[64]。**【p. 38 / fol. 19b】**父が死ぬとともに，義母（ögäy[65] anasï）[66]と城市〔をめぐり〕争った，と」。アーホン（Āḫvun）[67]は「国の事において内気，礼儀は役に立たない。内気により王国は荒廃する。事が失われてから後悔しても無益である」と言った。

この状態の時，ムッラー・サキー（Mullā Ṣaqī）が知らせを得て，協議に加わった。この秘密をムッラー・サキーは〔ある夫人（bir ḍa‘īfa）に言った。それから〕[68]，〔この夫人が〕ハーニム・パーディシャーに言った[69]。ハーニム・パーディシャーは疑い，ホージャ・ヤフヤー猊下を殺す動機をいだいた。数人の者の手に剣を与えて準備した。翌日の朝，ホージャ・ヤフヤーが来た。ハーニム・パーディシャーは怒って辛辣な言葉で，「おお，ホージャ・ヤフヤーよ，そなたから何が必要であるのか。わたしがここ，墓廟（mazār）で泊まるならば，そなたは城市で安らいで泊まるであろう。わたしが客人であるならば，また，そなたの母であるならば，これは何という礼儀知らずの事であろうか。そなたたちの何れの父祖がハーンとなってきたのか，我々の何れの父祖がハーンとなってきたのか。ハーン位を主張すること（ḫānlïq da‘wāsï qïlmaq）は，意味のない言葉である」と，誤った言い回しで（ġalaṭ ‘ibāratlär bilä）語った。ヤフヤー猊下は「あなた方への奉仕になるだろうかと〔思って〕，わたしはカシュガルにいた。そうでなければ，わたしは片隅で祈願者の仕事（du‘ā-gūylïq）をする」と言った。この状態の時，アブド・アルラティーフ・ブカーウル（‘Abd al-Laṭīf[70] Bukāvul）という利口な者がいた。〔この者は〕事が悪化しているのを知り，即座に合図した。ホージャ・ヤフヤーも自ら退いていった。ハーニム・パーディシャーはヤルカンドへ向かうことにした。**【p. 39 / fol. 20a】**数日後の夜，ディーヴァーナたちはミールザー・バラート・アーホンを手斧で殉教死させた。

63）D126 と Or. 5338, fol. 19a では mulāzimat とするが，ms. 3357, fol. 33a; Or. 9660, fol. 19b; Or. 9662, fol. 28a の malāmat が正しい。

64）D126 では MKYN，ms. 3357, fol. 33a; Or. 5338, fol. 19a; Or. 9660, fol. 19b では MYKYN と綴るが，Or. 9662, fol. 28a の MV AYKYN により mu ekin と読む。

65）D126 では AVKVY，Or. 9662, fol. 28a では AVKY と綴るが，ms. 3357, fol. 33a; Or. 5338, fol. 19a; Or. 9660, fol. 19b の AVKAY に従う。

66）ms. 3357, fol. 33a のみ「義母や弟」とする。

67）アーホン（Āḫvun）はアーホンド（Āḫvund）と同じで，ミールザー・バラート・アーホンドを指している。アーホン（アホン，アーホンド）はイスラームの諸学を修めた知識人のこと。

68）ms. 3357, fol. 33a による補足である（Cf. Or. 9660, fol. 19b; Or. 9662, fol. 28a）。

69）A グループ写本の Turk d. 20, fol. 30b; D191, fol. 36b では「この秘密をアーホンド・ムッラー・サキーの夫人（aġa / ḍa‘īfa）が聞き，ハーニム・パーディシャーに知らせた」と述べる。

70）D126 と Or. 5338, fol. 19b の綴り（‘ABD ALṬYF）を修正した。ms. 3357, fol. 34a; Or. 9660, fol. 20a; Or. 9662, fol. 28b は「ラティーフ・ブカーウル」とする。なお，トルコ語〔テュルク語〕のブカーウルは「毒見役」で，軍の監督官も務めたという（間野英二『バーブル・ナーマの研究 III 訳注』京都：松香堂，1998 年，68 頁，脚注 419）。

〔詩

冷酷な心に人は何と驚くだろう

手斧をミールザー・バラートの頭のてっぺんに振り下ろした〕[71]

六ヶ月後[72], ハーニム・パーディシャーの許可[73]でホージャ・ヤフヤーを殉教死させた[74]。さて, ホージャ・ヤフヤーに三人の息子がいた。その二人をディーヴァーナたち[75]は殉教死させた。もう一人の息子はホージャ・アフマド（Ḫōja Aḥmad）といった。彼をトョシュク山[76]に連れて逃げ，そこで救った。カランダル・ベグ（Qalandar Beg）の息子ムハンマド・エミーン・ベグ（Muḥammad Emīn Beg）がカシュガルに対してハーキムであった。彼を殺して，ムッラー・サキーをハーキムにした。ヤルカンドに対してシャー・サーイード・ベグ（Šāh Sa‘īd Beg）がハーキムであった。彼も捕まえて殺し，別のハーキムを置いて，〔ハーニム・パーディシャーは〕[77]息子の〔ホージャ・〕マフディー〔・ホージャム〕[78]をハーンに推戴した。その時，二人の者

71）このペルシア語の詩は D126; Or. 5338, fol. 19 にはなく，ms. 3357, fol. 34a; Cf. Or. 9660, fol. 20a; Cf. Or. 9662, fol. 28b により補う。

72）A グループ写本の Turk d. 20, fol. 31a; D191, fol. 37b では「猊下の逝去から六ヶ月後」。

73）ruḫṣat。D126 は RVḪṢT と綴るが，ms. 3357, fol. 34a; Or. 5338, fol. 19b; Or. 9660, fol. 20a; Or. 9662, fol. 28b の綴り RḪṢT が正しい。

74）“Geneaology der Chogas,” Ms.or.oct. 1692, pp. 164, 166 によれば，ホージャ・ヤフヤー・ハーン・ホージャムはホージャ・アーファーク・ホージャムより六ヶ月後，YFLAQ TRK で殉教者となり，その逝去の年は 1106 年（西暦 1694-95）である。ハルトマン氏は YFLAQ TRK を Yapalak Terek と読む（Martin Hartmann, *op. cit*., p. 313）。

75）Or. 9660, fol. 20a は「ディーヴァーナ・スーフィーたち」とする。

76）Töšük < TVŠVK Tāġ（「洞穴の山」）。英国のカシュガル総領事であった登山家のエリック・シプトン氏は，カシュガル西北西 25 マイル /40 キロほどにある「ぎざぎざのある岩峰の山なみ」を Tushuk Tagh（Cave Mountains）と名付けて探査している（エリック・シプトン（著）・水野勉（訳）『ヒマラヤ 人と辺境 7 ダッタンの山々』東京：白水社，1975 年，108-123 頁，Eric Shipton, *Mountains of Tartary*, London: Hodder and Stoughton, [1951], pp. 88-101）。原著の pp. 96, 97, 112, 113 および Diana Shipton, *The Antique Land*, London: Hodder and Stoughton, 1950, pp. 65, 96 に Tushuk Tagh の写真が載せられている。清・永貴撰，蘇爾德補『回疆志』巻 2 の「禱祀」に，カシュガルの「正北八十余里」にある「圖舒克塔克」〔トョシュク山〕についての記述があり，そこの「圖舒克洞」が聖地としてアーファーク派のホージャ・ブルハーン・アッディーンと結びついていたことが分かる（佐口透『18-19 世紀 東トルキスタン社会史研究』東京：吉川弘文館，1963 年，539-540 頁，嶋田襄平「アルティ・シャフルの和卓と汗と」『東洋学報』34 (1-4)，1952 年，116 頁）。なお，佐口氏の訳文では「西北八十余里」となっているが，原文は「西北」ではなく「正北」である。『回疆志』巻 1・巻 2 の校訂テキストは『トルキスタンの社会史・文化史に関する総合的研究』昭和 56 年度科学研究費補助金総合研究 (A) 研究成果報告書，代表：本田実信，1982 年に載せられている。

77）Or. 9662, fol. 28b による補足。

78）D126; Or. 5338, fol. 20a は「マフディー」とのみ記すが，ms. 3357, fol. 34a; Or. 9660, fol. 20a; Or. 9662, fol. 28b は「ホージャ・マフディー・ホージャム」と記す。

が殴り合いしたら殺し，女性が髪を梳かしたら殺すような[79]流血事となった。彼女自身[80]に一人の妹がいた。非常に美しかった。彼女の名はファクランドゥ・ハーニム（Fāqlāndū[81] Ḫānïm）といった。ホージャ・ヤフヤーに嫁がせて（nisbat qïlïp）いた。まだ子を産んでいなかった[82]。彼女をも妬みから脂に押しつけて殺した。人々は皆〔このことに〕[83]恐れおののき，〔ハーニム・パーディシャーは〕「死刑執行人たる后」（ジャッラード・ハーニム Jallād Ḫānïm）と呼ばれた。とうとう，ディーヴァーナたち[84]は短刀を使って〔ハーニム・パーディシャーを〕殺した。〔ハーニム・パーディシャーは〕鎧（savut）をつけて寝ていたらしい。鎧の裾を〔あげ〕[85]，短刀を使い殺した。命が尽きるまで，「この事をわたしに対しホージャ・マフディーがした」〔と言って〕[86]命が果てた。ホージャ・マフディー・ホージャムの息子はホージャ・ハサン・ホージャム（Ḫōja Ḥasan Ḫōjam）である[87]。

物語の章。聞かなければならない。

ムハンマド・エミーン・ハーンの弟アク・バシュ・ハーン（Aq Baš Ḫān）が来て城市に入って坐し，ヤルカンドで[88]千人[89]のディーヴァーナ[90]を捕らえ，**【p. 40 / fol. 20b】**羊のように喉を切り，血で水車をまわして小麦粉を挽いていた。カシュガルの人々はトョシュク山からホージャ・アフマド・ホージャムを連れてきてハーンに推戴した。クルグズ出身のアールズーマト

79）ここの比喩の意味は不分明である。

80）原語は özi なので「彼自身」とも訳せるが，ハーニム・パーディシャーを指していると考えられるので，「彼女自身」とした。

81）Or. 5338, fol. 20a; Or. 9660, fol. 20b では Fāqlāndūr。

82）D126 は tuġman idi と書くが，ms. 3357, fol. 34b; Or. 5338, fol. 20a; Or. 9660, fol. 20b の tuġmaġan erdi / idi による。

83）ms. 3357, fol. 34b; Or. 9660, fol. 20b の muniŋdin による補足。D126 は ḥūndin と記すが，ḫūndin の誤記であれば，「流血に恐れおののき」となろう。

84）Or. 9660, fol. 20b は「ディーヴァーナ・スーフィーたち」とする。

85）ms. 3357, fol. 35a; Or. 9660, fol. 20b の kötärip による補足。

86）ms. 3357, fol. 35a; Or. 5338, fol. 20a; Or. 9660, fol. 20b の dep による補足。

87）この一文は A グループ写本の Turk d. 20, fol. 31b; D191, fol. 37b にはない。Turk d. 20, fol. 30a によると，ホージャ・マフディーとホージャ・ハサンは兄弟である。本書の【p. 31 / fol. 16a】と【p. 36 / fol. 18b】の注を参照。

88）D126; Or. 5338, fol. 20a; Or. 9660, fol. 20b では YARKNDH と記すが，ms. 3357, fol. 35a の YARKNDDA または Or. 9662, fol. 29a の YARKNDDH に従う。

89）D126 では miŋ（千）の M の綴りが不分明であるが，ms. 3357, fol. 35a; Or. 5338, fol. 20a; Or. 9660, fol. 20b; Or. 9662, fol. 29a の綴り MYNK による。

90）Or. 9660, fol. 20b は「ディーヴァーナ・スーフィー」とする。

（Ārḍūmat[91]）がカラ・ハーン（qara ḫān）[92] になり，カラ・ザンギー・ベグ（Qara Zangī Beg）がハーキムに，そしてジャールーブ・ベグ（Jārūb Beg）がイシク・アガ（išik-aġa）[93] になった。ムッラー・サキー [94] が逃げてヤルカンドに来た。アク・バシュ・ハーンは〔彼を〕捕えて殺した。

ダーニヤール・ホージャムに手紙を送った。その内容は次のとおり。「我々の父祖たちはあなた方に帰心（inābat）してきた。今，国はからである。〔あなた方は〕絶対この地方に〔急いで〕[95] 来て王国を手中に収め，遅滞した者 [96] たちを道に導くように。手紙おわる」。この手紙が届くやいなや [97]，ダーニヤール・ホージャム猊下はフジャンド [98] からカシュガルに向かった。アールズーマトを先頭にカラ・ザンギー・ベグ，ジャールーブ・ベグが出迎えた。城市に招かなかった。カシュガルの人々は「我々にもホージャがいる」と言って許さなかった。〔カシュガルを〕通り過ぎてヤルカンドにお越しになった。ヤルカンドの人々はハーンを先頭に出迎えて完全な敬意をもって城市に入れ，ホージャの座に坐らせた。ハーンは相談してアラム・シャー・ベグ（‘Alam Šāh Beg）をハーキムに，シャー・ジャーファル・ベグ（Šāh Ja‘far Beg）をイシク・アガにして，ヤルカンドにいたシャフザーダ（šah-zāda）[99] はホージャ・マフディーを連れて，ハーン [100]〔や〕ダーニヤール・ホージャム猊下に別れを告げて，ヒンドゥースターン（Hindūstān）へ向かった。

さて，カシュガルの人々はクルグズたちと一つになって，ヤルカンドに害をおよぼし，強奪（qaraqčīlīq）をしていた。そして幾らかの者たちを夜に来て捕虜にし，完璧に害をおよぼしていた。結局，国を保つことはハーンなしにはいかなかった。カザーク（Qazāq）のハーンたちからハーシム・スルターン（Ḥāšim Sulṭān）を連れてきて，**【p. 41 / fol. 21a】**ハーンに推戴した。ある日，カシュガルから五百人の重装備の騎兵とともにカラ・ザンギー・ベグが，〔五百人の

91）D126 は ĀRḪVMT と綴るが，ms. 3357, fol. 35a; Or. 5338, fol. 20a; Or. 9660, fol. 20b の綴り ĀRḌVMT による。なお，直後の個所で D126 も ARḌVMT と綴っている。A グループ写本の Turk d. 20, fol. 32a は ĀRZV MḤMD (Ārzū Muḥammad)，D191, fol. 38a は ĀRḌV MḤMD (Ārḍū Muḥammad) とする。

92）ジューンガル（カルマク）が支配下のオアシス都市に置いたカラ・ハーンは徴税をおこなったが（佐口透『18－19 世紀 東トルキスタン社会史研究』42 頁参照），このアールズーマトの場合，その職務内容は不明である。

93）イシク・アガは，清朝統治期の用法からすると，ハーキムの副官であると見られる。

94）ムッラー・サキーはカシュガルのハーキムであった（本書【p. 39 / fol. 20a】）。

95）ms. 3357, fol. 35a の yïldam，Or. 9660, fol. 21a の zūd による補足。

96）D126 は KRAH と綴っているように見えるが，ms. 3357, fol. 35b; Or. 5338, fol. 20b; Or. 9660, fol. 21a; Or. 9662, fol. 29b により kamrāh と読む。

97）ms. 3357, fol. 35b; Or. 9660, fol. 21a; Or. 9662, fol. 29b では「この手紙の内容により」とする。

98）D126 は ḪVḪND と誤記する。Or. 5338, fol. 20b; Or. 9660, fol. 21a; Or. 9662, fol. 29b は ḪVJND，ms. 3357, fol. 35b は ḪJND と表記する。

99）ハーニム・パーディシャーの子を指すと思われるが，誰であるのか分らない。

100）D126; Or. 5338, fol. 20b では「ハーン・ホージャム」，ms. 3357, fol. 35b-36a; Or. 9662, fol. 29b では「ハーン」，Or. 9660, fol. 21a では「アク・バシュ・ハーン」となっている。

騎兵とともに〕[101] ジャールーブ･ベグが馬に乗ってヤルカンドに来た。「我々の一方はアルトゥン門（Altūn darvāzasï）より，もう一方はハーナカーフ門（Ḫānaqāh darvāzasï）より城市に入って，ハーシム・スルターンというカザークを，アラム・シャーという太っ腹を，シャー・ジャーファルという高慢ちきを，ホージャ・ダーニヤールとともに捕まえて出てこよう[102]」と申し合わせて進み，ヤルカンドに近づいたとき，この者たちに，「大軍がやってきた」という知らせが届いた。人々はそれぞれ自分の家屋（ハウリ）[103] において門を固めて屋根に人をあげて驚いていた。

さて，ハーシム･スルターンは知らせのないまま[104]，帽子･靴[105] とともに即座にヤサーウル（yasāvul）[106] の指揮棒（sarlïq ʻaṣā）を持って出て，家の正面[107] に一頭の痩せた馬がいたが，〔それに〕乗って，そこにいるカザークたちを馬駆けさせて，彼自身が軍勢に向かって行った。城市の門の前で対面した。ジャールーブ・ベグというクルグズは槍をすえてハーシム・スルターンに対して馬を駆けさせた。スルターンは槍をはねつけ，棒で槍が二つに折れるほど首を叩いた。〔ジャールーブ・ベグを〕退けて，その首を地面に倒れるほど叩いた。

〔詩
ひとかどの男にとって尽力は役に立たない
ひとかどの男がいない者には何の役に立とう
たとえ短刀があいだに入っても
さもなければ雌鳥の頭を持っていく〕[108]

また数人のクルグズたちを棒で叩いて倒し，踏みつけた。クルグズたちは驚き敗れて後ろへ

101）ms. 3357, fol. 36a; Or. 9660, fol. 21b; Or. 9662, fol. 30a により補う。

102）D126 は ḤYQAY MYZ と誤記するが，ms. 3357, fol. 36a の ČYQĠAYMIZ，Or. 9660, fol. 21b の JYQĠAYMZ により čïqġayïmïz と読む。

103）D126 では ḤVL，ms. 3357, fol. 36b では HVLY，Or. 5338, fol. 21a では ḤVYLY，Or. 9660, fol. 21b では ḤVLY，Or. 9662, fol. 30a では ḤALY JA と表記する。havlī / ḥavlī と読む。

104）D126 は SNJR と綴るが，ms. 3357, fol. 36b; Or. 5338, fol. 21a; Or. 9662, fol. 30a の綴り（BYḪBR）により，bī- ḥabar と読む。

105）帽子（börk）と靴（kafš）の間に JAN という語があるが，意味を解し得ない。

106）ヤサーウルは，「ハーンの傍らにいる近衛兵，君主らの傍らに立つ監視人・監督者，副官，整治官」などと説明される者である（間野英二『バーブル・ナーマの研究 IV 研究篇 バーブルとその時代』京都：松香堂，2001 年，375 頁，脚注 4）。

107）D126 は JLVH と綴るが，ms. 3357, fol. 36b; Or. 9660, fol. 21b; Or. 9662, fol. 30a の綴り（JLV）により jilau と読む。

108）このペルシア語の詩は D126; Or. 5338, fol. 21a にはなく，ms. 3357, fol. 36b; Cf. Or. 9660, fol. 22a; Cf. Or. 9662, fol. 30b により補う。

戻った。ダーニヤール・ホージャムはハーシム・スルターンのこの尽力を聞いて，ハーキムのアラム・シャー・ベグ，イシク・アガのシャー・ジャーファル・ベグを率い出て，ハーン〔ハーシム・スルターンのこと〕を援護した。〔戦いの〕[109] 用具を準備した。その時カラ・ザンギー・ベグが**【p. 42 / fol. 21b】**やって来た。即座に彼らと対面し，激しく戦った。結局，カシュガルの軍勢から「助命を，助命を」という声がきて，ヤルカンドの軍勢は戦いから手を引いて助命をした。

詩
わが運勢はわるく，わが幸運はさかさになり，わが運はおちぶれた
助命を，この圧迫から，おお，世界の王よ，助命を

翌朝，クルグズたちは講和のために口火を切って使者を送った。すなわち，「我々が今や二度とヤルカンドに向けて足を運ばないならば，ジャールーブ・ミールザーが彼らの手中におちいっているが，我々に彼を渡すならば，我々にヤルカンドから三百人の者が捕虜となっているが，彼らを渡そう」と。ダーニヤール・ホージャ猊下を始めとして皆の者は道理にかなうとみなした。しかし，ジャールーブ・ミールザーは死んでいる。死体を持ってきて血をぬぐい，一本の木を串にして〔外衣に立て，痩せた馬にしっかりと乗せて〕[110] 生きている人のようにして運んで進んだ。すると，クルグズたちは，遠くからジャールーブ・ベグがとても恥じ入って頭を上げることができないで来ている，ミールザーはサルトたち（sartlar）[111] の手に落ちたことを恥じて頭を上げないで来ている，とみなした。クルグズたちは三百人の捕虜を置いていた。こちらの者たちは動く死体を馬とともに置いて送った。捕虜たちはやって来て，軍勢に加わった。この死体はクルグズたちに加わった。クルグズたちは，いつのまにか死んで串に刺されているのを見た。「悲しいかな，ああ，いたわしい」といって泣き合いながら，死体を背負ってカシュガルへ去った。ヤルカンド側は，喜びの太鼓をたたいて，大喜びで城市に入った。この勝利，幸運の感謝のために金**【p. 43 / fol. 22a】**や銀をまいて，歓楽に，礼拝に顔を向けた。暫くして後，疑い深い者たちがダーニヤール・ホージャムを恐れて不安になり，ハーシム・スルターンに知らせた。敵意をあらわにした。スルターンは自らの不安により恐ろしくなり，自分の属人たちを連れて，カザークの境界に退いた。ヤルカンドの統治の王座はダーニヤール・ホージャム猊下に委ねられた。 数年統治した。

109）ms. 3357, fol. 37a; Cf. Or. 9660, fol. 22a により jang を補う。
110）ms. 3357, fol. 37b; Or. 9660, fol. 22b により補う。
111）サルトはオアシス農耕地域の定住民を指す。

物語の章。イラ[112]について聞かなければならない。

イラの地にいるカルマクたちの敵意があった。すなわち,〔かつて〕ホージャ・アーファーク・アズィーズの助けでムハンマド・エミーン・ハーンがカルマクたちの国（yurt）を攻め，捕虜にして四散させていた。カルマクたちは心を合わせて以前の敵意を鋭くし,「ホージャ・アーファークに，我々は庇護して国を取ってやり[113]，良いことをするのに，ホージャ・アーファークはムハンマド・エミーン・ハーンと一つになり，我々の国を荒廃させるのか」と言って，好機とみなして，大軍とともにカシュガルに来て，そこにとどまらずにヤルカンドに来た。

ダーニヤール・ホージャム猊下は明敏さにより，ムスリムたちにはカルマクに対抗する力はないということを知って仕方なく，＜出来ないことから逃げることは預言者たちのスンナの一つである＞というハディースにより行動し,戦闘から顔を背けて服従し,カーフィル（不信仰者）たちを迎えに出た。カーフィルたちは圧制･抑圧から手を引いて,この方に敬意･尊重を示して,ヤルカンドの王座に再び坐らせて，ヤルカンドから軍勢を率いて，ホージャムを**【p. 44 / fol. 22b】**同行させて，カシュガルへ進んだ。カシュガルの人々は数日，戦って，結局，こらえきれず服従して城門（darvāza）をあけた。ホージャ･ダーニヤール･ホージャムは得策として〔カルマクたちに〕,「もしそなたたちにムスリムたちの地方が必要であるならば，決してこの者たちのホージャを殺さないように。なぜならば,その方は預言者たちの子孫であるから。〔人々は〕その方の殺害に同意せず，短刀で刺しちがえて抱き合うようにして死んで果てる」と言った。カーフィルたちもこの言葉を道理にかなうとみなし，殺害から手を引いて，カシュガルの事を自らの権限のままに決定して，ホージャ・アフマド・ホージャム猊下を捕虜にして[114]，カシュガルに自ら望む者をハーキムにして，ダーニヤール・ホージャム猊下に退去許可を与えず，その家族とともにイラへ連れて行った。イラに到ったとき，王族カルマク（törä Qālmāq）はダーニヤール・ホージャムを完全に尊重して住まわせた。ホージャ・アフマド・ホージャムを，イ

112）天山山脈北麓のイリ（またはイリ河）を指している。本書【p. 29 / fol. 15a】の注を参照。

113）D126 では BARYB (barïp) と記すが，Or. 5338, fol. 22a の BRYB により berip と読む。

114）ブローフィ氏は，ホージャ・アフマドがジューンガル（カルマク）によりカシュガルから連れ去られた出来事を 1130/〔西暦〕1717-18 年とするオスマン語の書籍（Mehmed Âtif, *Kaşgar tarihi: Bâis-i hayret ahvâl-i garibesi*,〔Istanbul: 1301/1883-83〕）を挙げている（David Brophy, “Mongol-Turkic Language Contact in Eighteenth-century Xinjiang: Evidence from the Islāmnāma,” *Turkic Languages*, 15 (1), 2011, p. 63, note 16 参照）。しかし，Robert Barkley Shaw, “The History of the Khōjas of Eastern-Turkistān summarised from the Taẕkira-i-Khwājagān of Muḥammad Ṣādiq Kashghari,” p. 41, footnote 25 は，この出来事は 1713 年頃のことであろうとしている。

ラの辺境があり，エレン・カブルガ（Erän Qabūrġā）[115] と呼んでいたが，属人たちとともにそこに置いた。七年たつまで，このようにしていた。

物語の章。聞かなければならない。

〔かつて〕ムハンマド・エミーン・ハーンがイラを略奪し，三万人を捕虜にして来たときに，王公一族出身の（törä jamāʻalarïdïn）一人の美しい娘を，ムハンマド･エミーンはダーニヤール･ホージャムに捧げ物として送っていた（niyāz ibärgän idi）。ダーニヤール・ホージャム猊下はその娘のイスラーム〔への信仰心〕を新たにして婚姻にむかえていた。その娘の忘却の [116]**【p. 45 / fol. 23a】**貝に，〔数え切れない貴重な〕[117] 王族にふさわしい真珠 [118] が印として残っていたそうだ [119]。今回〔カルマクたちは〕[120] すべての捕虜になったカルマクたちを手中におさめていた。この娘も手中におさめて，王族カルマク出身の一人が取っていた。このカルマクが「わたしは人払いしたい（ḫalvat qïlay）」と言うたびに，その体に震えがおき，気を失っていた。〔その娘は〕分娩するまで，清らかなままであった。出産したとき，暗闇から生命の水が現れたようであった。ユースフ（Yūsuf）がカナーン（Kanʻān）から姿を出したように [121]，よい姿で清らかな天性の息子が生まれている。上等な絹布に巻いて，養育に勤しんだ。すぐに知性〔と〕理解力で飾られた。カルマクたちの言葉で（Qālmāqlar iṣṭilāḥlarïča）読み書き（ʻilm-i ḫaṭṭ）を教えていた。七歳になるまで，この者がムスリムの子（musulman-zāda）であることを，誰も

115）アラビア文字の表記は，D126; Or. 9662, fol. 32a で AYRAN QBVRĠA，ms. 3357, fol. 39b で AYRN QBVRĠA，Or. 5338, fol. 23a; Or. 9660, fol. 23b で AYRAN QBVRĠH である。エレン・カブルガは，イリ河の支流ハシュ（カシュ）河の水源付近の山地，エレーン・ハビルガの訛りであろう。若松寛「ツェワン・アラブタンの登場」『史林』48-6，1965 年，56 頁参照。張其昀（主編）『中華民国地図集 第二冊 中亜大陸辺疆』1960 年，E10 の地図に EREN HABIRGA の記載がある。

116）D126 は NYSAN と綴るが, ms. 3357, fol. 39b; Or. 5338, fol. 23a; Or. 9660, fol. 23b の NSYAN により nisyān / nasyān と読む。

117）ms. 3357, fol. 39b; Or. 9660, fol. 23b により補う。

118）D126; Or. 5338, fol. 23a; Or. 9660, fol. 23b; Or. 9662, fol. 32a は DVRY と綴るが，ms. 3357, fol. 39b の DR により durr-i と読む。

119）この一文の意味を解し得ない。Or. 9660, fol. 23b; Or. 9662, fol. 32a では「一人の息子が残っていたそうだ」という語句がある。

120）Or. 5338, fol. 23a により補う。ms. 3357, fol. 39b; Cf. Or. 9660, fol. 23b では「今回, すべての捕虜になった者たちを，ムスリムであろうと非ムスリムであろうと，カルマクたちはすべて手中におさめていた」と記されている。

121）この比喩は，カナーン出身の預言者ユースフが辛酸をなめてエジプトで暮らすようになる物語（『クルアーン』第 12 章）を踏まえているのであろうか。いずれにしても，本書の【p. 48 / fol. 24b】で後述されるように，この息子がユースフと名付けられたことの伏線であろう。

知らなかった。しかし，その母はこの秘密[122]をあかす方策を見いださないでいた。いつも悲嘆にくれていた。そして，この秘密を打ち明けるべきムスリムもまったくいなかった。

ところで，カルマクたちの部族（qabīla）はムスリムたちのいる所から一ヶ月遠方であった。偶然ある日，一人の商人（bāzargān / bāzirgān）[123]がその地を通りかかった。この夫人（ḍa‘īfa）は，この不信仰の栄える（kufr-ābād）部族に一人のムスリムがお越しになるのを見た。喜びのあまり，この五行詩を読んだ。

詩

夜に晩に悲しみにみちた拙宅に，かような客人が来た

光線の輝きが頬の火照りから明らかになった

心の家に，運命のなかに見いだせない印[124]が来た

【p. 46 / fol. 23b】心よ，喜べ，とうとう我が肉体に魂が来た

〔一語意味不明〕[125]おお，悲しい魂よ，永遠の生命が来た

結局のところ，この商人（saudāgar）を私室に呼び[126]，この幼児を見せて秘密を明かした。この商人はムッラー（mullā）[127]であった。即座に手紙をしたためさせ[128]，この商人に手渡した。そして，「あなたは〔この手紙を〕持って行って，ダーニヤール・ホージャム猊下にあずけよ。そして私から聞いたことも，そなたの口で説明するように。さもなければ，この子の信仰に対し保証人になって，復活の日にそなたの顔は黒くなる（yüzüŋ qara qoyar sen）」と言った。この商人はこの手紙をホージャム猊下に届けた。ダーニヤール・ホージャは手紙の内容を知って，「本当に正しい」と心に思った。子であることの真実は心に動揺[129]を生じさせた。すぐに，この手紙を持ち，この商人を連れて王（törä）の宮廷（orda）に行き，出来事を王に申し上げた。

122）D126; Or. 5338, fol. 23b は FSR と綴るが，ms. 3357, fol. 40a; Or. 9660, fol. 24a の SR により sirr と読む。

123）D126 では BAẒYRKAN，Or. 5338, fol. 23b では BAZYRKAN，Or. 9660, fol. 24a では BAZRKAN，ms. 3357, fol. 40b では BAZRKANY と綴る。

124）D126 は PR ŠAN と綴るが，ms. 3357, fol. 40b の BR NŠAN により bir nišān と読む。

125）QVAN（D126; ms. 3357, fol. 40a; Or. 5338, fol. 23b; Or. 9660, fol. 24a; Or. 9662, fol. 33a）。

126）D126 は ḫalvat，ms. 3357, fol. 40b; Or. 9662, fol. 33a は ḫalvat tapïp/ tafïp と書くが，Or. 5338, fol. 23b の ḫalvatkä čïrlap による。

127）イスラームの諸学を修めた知識人のこと。

128）D126 は kitāb qïldurup と書くが，ms. 3357, fol. 40b; Or. 5338, fol. 23b; Or. 9660, fol. 24a の kitābat qïldurup による。

129）D126 の ŠVRŠ，Or. 5338, fol. 24a の ŠVRYŠ により šūriš と読む。ms. 3357, fol. 41a; Or. 9660, fol. 24b; Or. 9662, fol. 33a の SVZYŠ（sūziš）によれば，「いらだち / 苦悩」というほどの意味になる。

王はこの手紙を読ませて口からも聞き，自分の家僕（ḫādim）[130] の一人のカルマクに，ホージャムの側から一人のハリーファに，ムッラー・イブラーヒーム・マシュフール（Mullā Ibrāhīm Mašhūr）[131] に，「もしこの事が正しいならば，その子をこの方の手に渡すように。そうでなければ，まさにこの婦人（maẓlūm）を，その婿[132] とともに子を，ここに連れてくるように」と命じた。

要するに，この者たちはその部族のところに到った。出来事を取り調べた。婦人は自供した。婿は自供しなかった[133]。その子を彼らに決して見せなかったのみならず，「ムスリムの人々は子どもをつかまえて食べる」と言って怖がらせてしまった。そのため，この子には**【p. 47 / fol. 24a】**ムスリムの人々を見る力がなく，また，生まれてからムスリムの人々を見たことがなかった。〔ヤサーウルがいて，行ったカルマクにも銀貨金貨を与えて，自分の側に従わせた〕[134]。ムスリムたちは論議できなかった。カルマクたちはこの夫人（ḍa‘īfa）に非難をこめて「ホージャ・ダーニヤールは美しいために，立派で勇敢であるために，そなたはそのように云う」と言って懲らしめていた。

〔詩

分らないでおれ，天女であるのか天使なのか，はたまた妖精か

人間の種類においてそれほど立派な若者（yigit）を，我々は見なかった〕[135]

結局のところ，皆が王族カルマクの宮廷に来た。この婿であるはずのカルマクは王公一族

130）D126; ms. 3357, fol. 41a; Or. 5338, fol. 24a; Or. 9660, fol. 24b; Or. 9662, fol. 33a は ḪADYM と綴る。

131） A グループの写本（Turk d. 20, fol. 35b; Cf. D191, fol. 42a）では「ハリーファ・ウバイド・アッラーと，アーホンド・ムッラー・イブラーヒームであるムッラー・マシュフール」としている。

132）D126; ms. 3357, fol. 41a; Or. 5338, fol. 24a; Or. 9660, fol. 24b; Or. 9662, fol. 33a において KYV と綴られている。KYV には Eidam（娘婿）の語義がある（Julius Theodor Zenker, *Türkisch-Arabisch-Persisches Handwörterbuch*, Hidesheim, New York: Georg Olms Verlag, 1979 (Nachdruck der Ausgabe Leipzig 1866), p. 787）。現代ウイグル語の küyö（飯沼英二『ウイグル語辞典』東京：穂高書店，1992 年，172 頁，新疆大学中国語系（編）『維漢詞典』烏魯木斉：新疆人民出版社，1982 年，225 頁），ウズベク語の kuyov（Natalie Waterson, *Uzbek-English Dictionary*, Oxford: Oxford University Press, 1980, p. 57）に当たる。

133）D126 では iqrār bolmadï と記されているが，ms. 3357, fol. 41b; Or. 9660, fol. 24b; Or. 9662, fol. 33b の iqrār qïlmadï による。

134）ms. 3357, fol. 41b; Or. 9660, fol. 24b; Or. 9662, fol. 33b により補う。

135）ms. 3357, fol. 41b; Or. 9662, fol. 33b; Cf, Or. 9660, fol. 25a により補う。

の出であったが，叫んでコンタージ（Qōŋtājī）[136] の足下に泣きながら倒れ込んで，「わたしには，この者よりほかに子がいない」と言った。王〔コンタージ〕は，「明日，ムスリムたちはみな自分の仕方で服を着てくるように。カルマクたちの貴人（uluġ）たちは集まれ」と命令した（yarlïġ qïldï）。朝，ティムール・ハーン（Timūr / Tīmūr Ḫān）[137] を始めとして，ダーニヤール・ホージャムはすべてのムスリムとともにターバン（dastār）をまとって来た[138]。カルマクたちの首領（sardār）たちも来て，コンタージの前で席を整えて（sorun tüzüp）[139] 坐った。一方にダー

136）ホンタイジの訛り。ここでは，ジューンガル遊牧国家の王ツェワンラブタン（在位 1694-1727 年）を指す。Robert Barkley Shaw, “The History of the Khōjas of Eastern-Turkistān summarised from the Tazkira-i-Khwājagān of Muḥammad Ṣādiq Kashghari,” p. 41, footnote 26 参照。

137）D126; Or. 5338, fol. 24b は TYMVR，ms. 3357, fol. 42a; Or. 9660, fol. 25a; Or. 9662, fol. 34a は TMVR と綴る。アーファーク派のブルハーン・アッディーンの子サリムサクと近しい関係にあった（*Mezhdunarodnye otnosheniya v Tsentral'noi Azii, XVII-XVIII vv. Dokumenty i materialy,* Kniga 2, Moskva: Nauka, 1989, p. 254）ムハンマド・アミーンは，「アブド・アッラシード・ハーンの息子エルケ・ハーンの息子ティムール・ハーン（Tīmūr Ḫān bin Erkä Ḫān bin ‘Abd al-Rašīd Ḫān）」と記す（Zayn al-dīn Muḥammad Amīn Ṣadr Kāšġarī, *Āṯār al-fuṭūh*, Institut vostokobedeniya Akademii Nauk Respubliki Uzbekistan, No. 753, fol. 133a）。次注のとおり，アブド・アッラシード・ハーンはヤルカンド・ハーン家の成員であり，その子孫がイリに留め置かれていたのである。

138）A グループの写本（Turk d. 20, fol. 36a; Cf. D191, fol. 42b）は「翌日の朝，ムスリムたちからホージャ・ダーニヤール・アズィーズ猊下，ティームール・ハーン，エルケ・ハーン（Erkä Ḫān）を始めとしてムスリムの一団が一方に，カルマクたちの軍司令官たちが〔もう〕一方に，列を整えて坐った」と記し，エルケ・ハーンなる人物が加えられている（小沼孝博『清と中央アジア草原――遊牧民の世界から帝国の辺境へ――』東京：東京大学出版会，2014 年，43 頁，注 56（初出は 2009 年）も参照のこと）。佐口氏の研究によれば，額爾克蘇爾唐（Erke Sulṭān）はモグール・チャガタイ・ハーン家（ヤルカンド・ハーン家）の阿卜都里什特（‘Abd al-Rashīd II）の子である。佐口透『18 － 19 世紀東トルキスタン社会史研究』14-15 頁，佐口透「チャガタイ・ハン家の末裔と清朝」松田壽男博士古稀記念出版委員会（編）『東西文化交流史』東京：雄山閣出版，1975 年，373, 374 頁（佐口透『新疆民族研究』東京：吉川弘文館，1986 年，139，141 頁）参照。

139）D126 では SVRVN TVRVB と綴るが，ms. 3357, fol. 42a; Or. 5338, fol. 24b; Or. 9660, fol. 25a; Or. 9662, fol. 34a の SVRVN TVZVB により sorun tüzüp と読む。sorun は「場所，席」，sorun tüz- は「席を整える」という意味である（飯沼英二『ウイグル語辞典』332 頁，新疆大学中国語系（編）『維漢詞典』425 頁，Cf.『維吾爾語詳解辞典 縮印本（維吾爾文）』烏魯木斉：新疆人民出版社，1999 年，632 頁）。小沼氏は「会議（sürün）を開き」と読み，「ザルゴ（法廷）」開催の場面と理解する（小沼孝博『清と中央アジア草原』43 頁）。おそらく小沼氏の理解は正しいであろうが，sürün という単語とその語義（a Royal assembly, a King's Court）を，同氏が依拠した Robert Barkley Shaw, *A Sketch of the Turki Language as Spoken in Eastern Turkistan (Kàshghar and Yarkand*), Part 2: Vocabulary, Turki-English, Culcutta, 1880, p. 124）以外の辞典では見出していないので，「席を整えて」と訳す。なお，A グループの写本（Turk d. 20, fol. 36a; Cf. D191, fol. 42b）には sorun tüzüp という表現はなく，「ムスリムたちの一団は自分たちの仕方で服を着てターバンをつけて sorun に入って来るように（sorunġa dāḫil bolġay）」と述べられている。なお，『バーブル・ナーマ』には SVRVN AYLY という語があり，「上訴の人々」と訳されている（間野英二『バーブル・ナーマの研究 I 校訂本』京都：松香堂，1995 年，74 頁，24 行目，間野英二『バーブル・ナーマの研究 III 訳注』92 頁）。

ニヤール・ホージャムをはじめとするターバンの人々（ahl-i dastār ḫalq）が坐った。カルマクたちはこの子に「決して白いターバンに近づかないように。捕えて食べてしまう。そなたのカルマクの父の胸に行って坐れ」と教えた。その後，王は命じて，その子を連れてきた。〔王は〕「お前の父がカルマクであるならば，そのもとに行け。もしお前の父がホージャであるならば，そのもとに行け」と言い，子を真ん中に置いてやった。ダーニヤール・ホージャム猊下も列席の者たちに顔を向けて（ḥaḍarātġa[140] tawaccuh qïlïp）坐っていた。子は真ん中に行き，カルマクの側に向かって**【p. 48 / fol. 24b】**近づいた時，大きな声で泣いて，ダーニヤール・ホージャム猊下の胸に倒れ込んで，気を失ってしまった。叫び声が両側から起こった。思わず人々はみな泣いた。

〔詩
もし，痕跡がこの者の心を感動させないならば，
地表を沈める，わたしの流す涙から何の成果が〕[141]

要するに，コンタージは泣いて，「おお，ホージャムよ，そなたの信仰は正しいようだ。息子はそなたのものらしい。私は〔この子を〕そなたに与えた。さらに，四つの城市 (tört šahr)[142] の王権（pādišāhlïq）を，私はそなたに与えた。行ってそなた自身の城市に滞在せよ」と言って許可を与えた。ダーニヤール・ホージャムは至高の神に感謝と称賛の意を表し，カルマクたちの束縛から自由になって，ホージャ・ジャハーン・ホージャム猊下（Ḥaḍrat-i Ḫōja Jahān Ḫōjam）を王〔コンタージ〕の随行に残して，自身は〔統治の王座（sarīr-i salṭanat）とともに〕[143] ヤルカンドにお越しになった。その子にイスラームの服を着させて，大祝宴（uluġ toy）をして，〔完全なる優美さの故に〕[144] ユースフ・ホージャ（Yūsuf Ḫōja）と名付けた。

物語の章。聞かなければならない。

ダーニヤール・ホージャ猊下はヤルカンドに来た。ヤルカンドの人々は老いも若きも（uluġ kičik）出迎えて城市に連れて入った。〔猊下は〕尊敬を表されて統治の王座（taḫt-i salṭanat）に

140）D126 では HZATQH，Or. 9660, fol. 25a では MZART ĠH，Or. 9662, fol. 34a では ḤḎHRATLARĠH。ms. 3357, fol. 42b の ḤḎRATĠH による。
141）ms. 3357, fol. 42b; Cf. Or. 9660, fol. 25b; Cf. Or. 9662, fol. 34a により補う。
142）すぐ後の段落の記事からすると，ヤルカンド，カシュガル，アクス，ホタンを指していよう。
143）ms. 3357, fol. 43a; Cf. Or. 9660, fol. 25b により補う。なお, Or. 9662, fol. 34b は「スルターンの息子とともに」とするが，文脈にあわない。
144）ms. 3357, fol. 43a; Cf. Or. 9660, fol. 25b; Cf. Or. 9662, fol. 34b により補う。

確乎となった。カシュガル，アクス，ホタン[145]のハーキムたちに手紙を送って命令を布き，人々を救済に導いて（hidāyatkä indep）誤った道から戻らせ，司法と審判（dād soraġlarï）を聖法（シャリーア）の命令に違反せず，至高の神に感謝，称賛して礼拝（‘ibādat）に勤しみ，〔日々を過ごしていた。ユースフ・ホージャムを割礼[146]させて，知識習得に努めて〕[147]短い時機で洞察力[148]，美徳を得た。

さて，ホージャ・アーファーク・アズィーズの時に，十万人から十万テンゲ[149]の税（ḫarāj）を取っていた。今もヤルカンド，カシュガル，ホタン[150]からであり，年に十万**【p. 49 / fol. 25a】**テンゲを取っていた[151]。そして時々，イラに行って，王（törä）〔コンタージ〕に会っていた。そして七年がこのようにして経った。コンタージの娘をトルグート・カルマク（Tōrġūt Qālmāq）の王（törä）の息子に与えることになり，この「七つの城市」（yetä šahr / Yetä Šahr）[152]の首領（sardār）たちを，ホージャ・ダーニヤール・ホージャムを始めとして，婚礼（toy）に呼んだ。やむを得ずイラに行った。コンタージはムスリムのやり方で婚礼の準備〔として〕

145）D126 では ḪVTN と表記されているが，ms. 3357, fol. 43a; Or. 5338, fol. 25a; Or. 9660, fol. 25b; Or. 9662, fol. 34b の ḪTN による。

146）ms. 3357, fol. 43b; Or. 5338, fol. 25a; Or. 9660, fol. 25b; Or. 9662, fol. 34b は ḪṬNH と綴るが，ḫatna / ḫutna と読む。

147）ms. 3357, fol. 43b; Or. 5338, fol. 25a-b; Cf. Or. 9660, fol. 26a; Or. 9662, fol. 34b により補う。

148）ms. 3357, fol. 43b; Or. 5338, fol. 25b; Or. 9660, fol. 26a; Or. 9662, fol. 34b は ḪYLH と綴るが，D126 の ḤYLH により ḥīla と読む。

149）D126; Or. 5338, fol. 25b は「千テンゲ」とするが，ms. 3357, fol. 43b; Or. 9660, fol. 26a による。

150）D126; Or. 9660, fol. 26a では ḪVTN と表記されているが，ms. 3357, fol. 43b; Or. 5338, fol. 25b の ḪTN による。

151）Or. 9662, fol. 34b-35a は「ホージャ・アーファーク・アズィーズ猊下の時にカシュガル，アクス，ホタン，ヤルカンドから年に 10 万テンゲを出していた。今もまた同じ税（ḫarāj）を取っていた」と記す。ホージャ・アーファーク時代のカルマクへの貢納について，本書【p. 30 / fol. 15b】にも記事がある。カルマク（ジューンガル王国）に納めた税については，羽田明『中央アジア史研究』京都：臨川書店，1982 年の「第 5 章 ジュンガル王国とブハーラ人――内陸アジアの遊牧民とオアシス農耕民――」（初出：1954 年）266-272 頁，佐口透『18 － 19 世紀 東トルキスタン社会史研究』40-44 頁，嶋田襄平「清代回疆の人頭税」『史学雑誌』61-11，1952 年，27-28 頁，James A. Millward, *Eurasian Crossroads. A History of Xinjiang,* London: C. Hurst & Company, 2007, p. 92，James Millward, “Eastern Central Asia (Xinjiang): 1300-1800,” in Nicola Di Cosmo, Allen Frank, and Peter B. Golden (ed.), *The Cambridge History of Inner Asia: the Chinggisid Age,* Cambridge University Press, 2009, p. 268 を参照。

152）イェテ・シャフル（イェッティ・シャフル）は，タリム盆地周縁オアシス地域に対する総称であるアルティ・シャフル（「六つの都市」）と類似した呼称である。新免康「アルティ・シャフル」小松久男ほか編『中央ユーラシアを知る辞典』東京：平凡社，2005 年，41 頁を参照。

ヒンドゥースターン（Hindūstān）の品物の比類なき真珠[153]，〔無比の〕[154]宝石などを求めた。これらの者たちには，それに相応しい品物がなかった。王は怒って（töräniŋ qahrï[155] kelip），「もし，そなたたちが，この品物を見いだして出さないならば，そなたたちを皆，私は殺す」と命令した。

詩

おお，ムスリムたちよ，知れ。運命が我々をみじめにした

百人のムスリムの騎兵隊を[156] 一人のムスリムでない者の前で

このカーフィルの処罰を恐れて，すべての人々はダーニヤール・ホージャム猊下の足下に伏した。そして，「おお，ホージャムよ，この災難の克服を（bu balānïŋ daf'ïnï）[157]，猊下（ḥaḍratlar）がしなければ，事は難しくなるはずだ」と言った。ホージャムは頭をうなだれて，一時のちに頭をあげて，「おお，ムスリムたちよ，今夜我々は皆，徹夜してホージャ猊下たち（Ḥaḍrat-i Ḫōjagān）の諸霊魂[158]におすがりしよう。きっとこの災難から我々は解放されるにちがいない」と言った。その夜ムスリムたちはある所に集まって心底から嘆き泣きくずれた。夜半になっていた。祈願（du'ā）に手をあげた。最初の夜明けまで〔祈願を続けた〕。**【p. 50 / fol. 25b】**それから＜神は偉大なり＞と言って祈願を終え〔ると〕，ムスリムたちに良きお告げ（bišārat）が届けられた。すなわち，「おそらく，我々を彼の邪悪から解放したことになろう」と言っていた。「コンタージが死んだ。彼の代わりに息子のガルダン・チェリン（Ġāldān Čerīn）[159]が王（törä）になった」という叫び声が生じた。〔ムスリムたちは〕[160]この知らせを聞いて，カーフィルの宮廷に行った。出来事を〔次のように聞いた〕[161]。すなわち，コンタージ

153）D126; Or. 9662, fol. 34b では DVRY，Or. 5338, fol. 25b; Or. 9660, fol. 26a では DRY と綴るが，ms. 3357, fol. 44a の DR により durr-i と読む。

154）ms. 3357, fol. 44a により yak-dāna を補う。

155）D126 は QHR と綴るが，ms. 3357, fol. 44a; Or. 5338, fol. 25b; Or. 9660, fol. 26a; Or. 9662, fol. 35a の QHRY による。

156）D126 は ḪLYNY と綴るが, ms. 3357, fol. 44a; Or. 5338, fol. 25b; Or. 9660, fol. 26a の ḪYLNY により ḥaylnï と読む。

157）D126; Or. 5338, fol. 25b は「この者たちの撃退を」, Or. 9662, fol. 35a では「この不信心者（カーフィル）の撃退」とするが，ms. 3357, fol. 44a; Or. 9660, fol. 26a による。

158）D126 は ARRAḤ と誤記するが，ms. 3357, fol. 44b; Or. 5338, fol. 25a; Or. 9660, fol. 26b により arwāḥ と読む。

159）ツェワンラブタンの子ガルダンツェリン（在位 1727-45 年）。

160）ms. 3357, fol. 44b; Or. 5338, fol. 26a により補う。

161）ms. 3357, fol. 45a; Or. 9660, fol. 26b により補う。

の夫人（ḫatun）が「わが息子を王にする」と言って，夫[162]に毒をもって殺した。しかし，ガルダン・チェリンは別の母からの生まれであった。この知らせをガルダン・チェリンは聞き，カルマクたちの首領たちと〔一つになって〕[163]義理の母（ögäy[164] ana）を捕らえて殺し，弟も殺し，王座（taḫt）にのぼって坐っている[165]。

それからガルダン・チェリンはすべての首領たちを集めて皆に「おまえたちは皆，自分の地方（diyār）に行くように」と命令した。そして〔ダーニヤール・〕ホージャム〔猊下〕[166]に「おお，ホージャムよ，そなたたちもヤルカンドに行き，それらの城市の統治の王座におるように」と言って許可[167]を与えた。ダーニヤール・ホージャムをはじめ皆は祖国（vaṭan）に戻り，神の御前に顔を向けて感謝と称賛をおこなった。イスハーク・ワリー猊下にハーンが寄進（naẕr）して与えたワクフ地（waqf zamīnlar）の収穫を自分たち自身に費やして，国（mamlakat）から得られた貢納（bāj ḫarāj）を強制され仕方なくカルマクに与えていた。

結局の所，〔ホージャ・ダーニヤールは〕病気になった。だんだんと衰弱がひどくなり，カ

162）KYV。本書【p. 46 / fol. 23b】にもこの単語があり，そこでは「婿」と訳した。Or. 9662, fol. 35b は KYV ではなく，er < AYR（är：夫）という単語を使っている。

163）ms. 3357, fol. 45a; Or. 9660, fol. 27a により補う。

164）D126 は AVKVY と綴るが, ms. 3357, fol. 45a; Or. 5338, fol. 26a; Or. 9660, fol. 27a の AVKAY による。

165）宮脇淳子氏の研究によると，1727 年にヴォルガ河畔からトルグートの使節が到着したすぐあとにツェワンラブタンが毒をもられて急死し，その第一夫人グンガラブタン（青海ホシュート部長ラサン・ハーンの妹）の息子ガルダンツェリンは父の第二夫人セテルジャブ（ヴォルガ・トルグート部長アユーキの娘）を毒殺の罪で処刑した。セテルジャブの息子ロブサンショノはヴォルガへ逃げた。宮脇淳子『最後の遊牧帝国』東京：講談社，1995 年，216-217 頁，同著『モンゴルの歴史――遊牧民の誕生からモンゴル国まで』東京：刀水書房，2002 年，205 頁を参照。ズラトキン氏の研究によれば，1723 年にツェワンラブタンは自分の娘をアユカ・ハーン〔アユーキのこと〕の息子と結婚させようと使節をヴォルガに派遣した。翌年には，ツェワンラブタンの娘たちをアユカ・ハーンの別の 3 人の息子の妻にしようと，ヴォルガからザイサンのエヘ・アブガイなる使節が送られてきた。ツェワンラブタンはその使節を歓待し，娘たちを送り出すことを約束した。1727 年にヴォルガから新たな使節たちがやって来たが，その時，ツェワンラブタンが急死した。アユカ・ハーンの使節たちはツェワンラブタン毒殺の嫌疑をかけられた。ガルダンツェリンはその使節団の 4 人を死刑に処して 2 人を追放してエヘ・アブガイを 1 年，獄につなぎ，自分の義母とその 3 人の娘を死刑に処した。I. Ya. Zlatkin, *Istoriya Dzhungarskogo Khanstva 1635-1758,* Izdanie vtoroe, Moskva: Nauka, 1983, p. 235 を参照。なお，アユーキ・ハーンは 1724 年 2 月 19 日に 77 歳で亡くなっている（Michael Khodarkovsky, *Where Two World Met. The Russian State and the Kalmyk Nomads, 1600-1771,* Ithaca and London: Cornell University Press, 1992, p. 174）。

166）ms. 3357, fol. 45a の Ḥaḍrat-i Dāniyāl Ḫōjam による。

167）D126 は RVḪṢT と綴るが，ms. 3357, fol. 45a; Or. 5338, fol. 26b; Or. 9660, fol. 27a; Or. 9662, fol. 35b の RḪṢT により ruḫṣat と読む。

ルマクたちに人を遣らせて[168]，ホージャ・ジャハーン・ホージャムをイラから連れてきて，**【p. 51 / fol. 26a】**キスして遺言した。すなわち，「私はすべての成熟・未成熟のか弱き女性たち（‘ājizalar）[169]をまず，至高の神に委ねた。その後，我が父祖たち〔の諸霊魂〕[170]に委ねた。おお，わが子ホージャ・ジャハーンよ，私はそなたを偉大なる我が祖先に委ねた。この，そなたの同胞（qarïndaš）たちの教導におこたるな。至高の神に不注意であるな。聖法（シャリーア）の命令から顔をそむけるな。我々に預言者＜神が彼に祝福と平安をあたえますように＞からの知識〔・行動〕[171]は遺産である。銀貨金貨は残っていない。私はこのカーフィルたちに屈服従順するよりほかに仕方なかった。イスラームの剣を振い得なかった。やむなく，この希望[172]をもって来世へ去った。しかし，そなたたちはこの希望を実現するように。このカーフィルたちの分裂の時がそなたたちに割り当てられるだろう」と言って，魂を神に引き渡した。＜「我々は神のもの。我々は神のみもとに帰る」と言われている＞〔『クルアーン』2-156〕。ヤルカンドにおいて[173]，〔あらたに大騒ぎとなった（qiyāmat tāza boldï）[174]。〕叫び声，ああ悲しいかな，ああ悲惨な，という声が回転する天空に達した。そして会合の人（ahl-i maclislar）の燭光は消えた。城市の人や荒野[175]の人が集まり，経帷子を着せて支度を整え，礼拝をおこない，アルトゥン内に埋葬した。

この方〔ホージャ・ダーニヤール〕から五人の男の子[176]，数人の女の子[177]が残った。息子たちの一番目はホージャ・ジャハーン・ホージャム，二番目はアイユーブ・ホージャム（Ayyūb Ḫōjam），三番目はユースフ・ホージャム（Yūsuf Ḫōjam），四番目はハームーシュ・ホージャム（Ḫāmūš Ḫōjam），五番目はアブド・アッラー・ホージャム（‘Abd Allāh Ḫōjam）。さて，王

168）ms. 3357, fol. 45b; Or. 9662, fol. 36a は「手紙を送り（nāma ibärip）」，Or. 9660, fol. 27a は「手紙を送らせ（nāma ibärtip）」とする。

169）Or. 9660, fol. 27a では，「か弱き女性・夫人たち（‘ājiza ḍa‘īfalar）」。

170）ms. 3357, fol. 45b; Or. 9660, fol. 27a により「の諸霊魂（arwāḥlarï）」を補う。

171）ms. 3357, fol. 46a; Or. 9660, fol. 27b; Or. 9662, fol. 36a により「行動（‘amal）」を補う。

172）D126; ms. 3357, fol. 46a; Or. 5338, fol. 27a; Or. 9660, fol. 27b; Or. 9662, fol. 36a では，ARḌV と綴るが，ārzū と読む。

173）D126 では YARKNDA と綴るが，ms. 3357, fol. 46a; Or. 5338, fol. 27a; Or. 9660, fol. 27b の YARKNDDA, Or. 9662, fol. 36a の YARKNDDH に従う。

174）ms. 3357, fol. 46a; Or. 9660, fol. 27b; Or. 9662, fol. 36a により補う。

175）D126 は SHRA と綴るが，ms. 3357, fol. 46a; Or. 5338, fol. 27a; Or. 9660, fol. 27b; Or. 9662, fol. 36b の綴りにより ṣaḥrā と読む。

176）D126 と Or. 5338, fol. 27a では oġul，ms. 3357, fol. 46b; Or. 9660, fol. 27b; Or. 9662, fol. 36b では oġul farzand。

177）D126 と Or. 5338, fol. 27a では ‘ājiza, ms. 3357, fol. 46b では ‘ājizalar farzand ; Or. 9660, fol. 27b では ‘ājiza farzandlarï; Or. 9662, fol. 36b では ‘ājiza farzand。

女たち（‘ājiza pādišāhlar）[178] をホージャ・ジャハーン・ホージャムは非常にかわいがっていた[179]。この方たちもホージャ・ジャハーン・ホージャムを偉大な父[180]の代わりと見なしていた。

さて，王族カルマクはダーニヤール・ホージャムが死去したことを聞いて，手紙を書いて捺印していた（ḥaṭṭ tamġa qïlïp erdi）。**【p. 52 / fol. 26b】**すなわち，それぞれのホージャムに一つの城市の王権を授けた（bir šahrniŋ pādišāhlïġïnï tafwīḍ[181] qïldï）。ヤルカンドをホージャ・ジャハーン・ホージャムに，カシュガルをユースフ・ホージャムに，アクスをアイユーブ・ホージャムに，ホタン[182]をアブド・アッラー・ホージャムに〔授けた〕。このアズィーズ（尊師）たちはこれらの城市の統治の王座（taḫt-i salṭanat）に確乎となり，貧者たちの司法と審判（dād soraġlarï）を聖法（シャリーア）の命令で治め，イスラームの信仰を広めていた。

さて，ホージャ・ジャハーン・ホージャムはヤルカンドのウラマーや賢人たちとともに宴席（mašrab）を催し，救世主のような言葉で宴席の人々（ahl-i mašrablär）に好意を示し，〔宴席を人々で〕一杯に満たしていた。そして時に，国の人々（ahl-i mamlakatlär）とともに坐して，国[183]の繁栄と良好に努めていた（sa‘y vä sabablar qïlur erdilär）。そして時に，告訴人たち（dād-ḫvāhlar）を聖法で審理し，公正をはかっていた。そして時に，ウラマーたちとともに伝記や歴史の本を読んで，偉大な預言者たちや寛大な聖者たちや過去の帝王たち[184]の物語を聞いて，諸霊魂に神聖な言葉を詠み，贈り物をしていた。そして時に，詩集の本やマスナヴィー詩集から言葉を取り出して真実や霊知を説明〔し〕[185]，〔スーフィズムにおける〕ジャズバ（jaẕba[186]「魅惑」）や心的状態（ḥālāt）[187]を明らかにしていた。そして時に，詩を作り，心の収穫物に火が

178）ホージャ・ダーニヤールの娘たちを指している。

179）navāziš qïlur erdilär。D126; Or. 5338, fol. 27a; Or. 9660, fol. 27b; Or. 9662, fol. 36b は NVAZYŠ と綴るが，ms. 3357, fol. 46b の NVAZŠ が正しい綴りである。

180）pidar-i buzurgvār。D126; Or. 5338, fol. 27a; Or. 9660, fol. 27b は PDRY と綴るが，ms. 3357, fol. 46b; Or. 9662, fol. 36b のように PDR が正しい。

181）D126 は TF(Q)VYZ，ms. 3357, fol. 46b は TFVYZ，Or. 5338, fol. 27a は TF(Q)VYḌ，Or. 9660, fol. 28a は TQVYZ，Or. 9662, fol. 36b は TQDYR と綴るが，tafwīḍ と読む。

182）D126; Or. 9660, fol. 28a では ḪVTN と表記されているが，ms. 3357, fol. 46b; Or. 5338, fol. 27a; Or. 9662, fol. 36b の ḪTN による。

183）yurt。D126 は YVRVT と綴るが，Or. 5338, fol. 27b の YVRT に従う。なお，ms. 3357, fol. 47a; Or. 9662, fol. 37a は diyār mamlakat，Or. 9660, fol. 28a は ahlī mamlakat と記す。

184）pādišāh-i mā taqaddamlar。D126; Or. 9660, fol. 28a; Or. 9662, fol. 37a は PADŠAHY と綴るが，ms. 3357, fol. 47a; Or. 5338, fol. 27b の PADŠAH が正しい。

185）ms. 3357, fol. 47b; Or. 5338, fol. 27b; Or. 9660, fol. 28b; Or. 9662, fol. 37a により äyläp を補う。

186）D126; Or. 5338, fol. 27b; Or. 9660, fol. 28b; Or. 9662, fol. 37a は JD と記すが，ms. 3357, fol. 47b の JẒBH による。

187）D126; Or. 5338, fol. 27b は JALAT と綴るが，ms. 3357, fol. 47b; Or. 9660, fol. 28b; Or. 9662, fol. 37a の ḤALAT に従う。

点けられたように頌詩[188]，詩を整理していた。そして時に，詩人たちとともに坐して詩【**p. 53 / fol. 27a**】句を選び，好みの詩人たちに王にふさわしい愛顧を示し，帝王風の衣装を着させて栄誉を与えていた。毎週，月曜日と水曜日に学習，研究をして，アーホン･サイイド･ホージャ（Āḫun Sayyid Ḫōja）[189] の講義室にお越しになり，知識の習得をしていた。そして，いくらかの優れた認識力のある，目覚ましく進歩した学究たちに議論[190] させて，議論において口論となれば，彼自身が解決していた。そして，いくらかの人（ādamī-zāda）や未亡人たちに好意を示して〔働く〕場所を与え（sorun berip），その状況をみて職務を授与していた。そして，いくらかの暗愚な者たちに計算ずくの助言説諭により怒りの眼差しを示し，懲らしめていた。そして，反抗的な者たちを卑しめ[191]，狡猾な者たちを服従させていた。毎日，国の人々に，ウラマーやアミールたちに様々な食事により栄誉を与えていた。老いも若きも（čoŋ kičik）すべて[192]，この崇高な王の存続（bu ʻālī šāh maqām）を求めていた。後にも先にも，このような時代はなかったと言っていた。いくらかの者たちはスルターン・フサイン・ミールザー陛下（Ḥaḍrat-i Sulṭān Ḥusayn Mīrzā）[193] の時代になぞらえていた。いくらかの者たちは，それ以上であると見なしていた。預言者のハディース，すなわち，＜預言者――かれの上に平安がありますように――は言った。そなたたちは，神のために私の子孫，この善人たちを，私のためにこの悪人たちを敬え＞[194]，つまり，神の使徒は「そなたたちは，私の子孫，敬虔で有徳な者たちに神のために敬意を示せ，そして，敬虔でない者たちに私のために敬意を示せ」と言っている。

〔以下，日本語訳注（3）に続く〕

188）qaṣāyid。ms. 3357, fol. 47b; Or. 5338, fol. 27b; Or. 9662, fol. 37a は QṢD と綴るが, D126 の QṢAYD に従う。

189）A グループの写本（Turk d. 20, fol. 40a; Cf. D191, fol. 46b）では，「ホージャ・アーホンドと称されるアーホンド・サイイド・ホージャ・イスハーク」と名を挙げている。

190）munāẓara。D126; ms. 3357, fol. 47b; Or. 5338, fol. 28a; Or. 9660, fol. 28b は MNAZRH と綴るが, ms. 3357, fol. 47b は直後の単語を MNAẒRH と正しく綴っており，それに従う。

191）fast (< past)。D126; Or. 5338, fol. 28a では FN，Or. 9660, fol. 28b では FS。ms. 3357, fol. 48a の FST に従う。

192）D126 は nečä と記すが，ms. 3357, fol. 48a; Or. 5338, fol. 28a; Or. 9660, fol. 28b; Or. 9662, fol. 37b の hama に従う。

193）ティムール朝ヘラート政権の君主（在位 1469-1506 年），教養人であるとともに文化を保護者したフサイン・バイカラを指していると考えられる。久保一之「フサイン・バイカラ」大塚和夫ほか編『岩波イスラーム辞典』東京：岩波書店，2002 年，844 頁を参照。

194）B グループの写本はこのアラブ文の「ハディース」を不完全に記しているので，A グループの写本（Turk d. 20, fol. 40b; Cf. D191, fol. 47a）によった。